

沖縄県文化財調査報告書第81集

北谷町  
**砂辺サーク原遺跡**

—北谷浄水場への導入管敷設工  
事に伴う緊急発掘調査報告書—

1987年3月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書第81集

北谷町  
砂辺サーク原遺跡

一九八七年三月

沖縄県教育委員会

北谷町

# 砂辺サーク原遺跡

—北谷浄水場への導入管敷設工  
事に伴う緊急発掘調査報告書—

1987年3月

沖縄県教育委員会



## 序

本報告書は沖縄県企業局による、北谷浄水場への導水管敷設工事に伴う埋蔵文化財「砂辺サーク原遺跡」緊急発掘調査の、成果を記録したものであります。

わが沖縄県の水資源をめぐる課題については、その解決をめざしていろいろな対策が講じられてきているようであります。そのひとつとして北谷浄水場の建設及び導水管敷設工事が計画されたわけではありますが、後者の工事予定地域に埋蔵文化財「砂辺サーク原遺跡」が含まれておりました。そこで、その取り扱いについて事業者と当委員会とで協議を進めてきたのでありますが、現況保存はきわめて困難であり、やむを得ず記録保存を措置をとることとなった次第であります。

当遺跡の調査の成果については本文に記すとおりであります。原始時代の土器や石器、ブロンズ時代および近世の陶磁器などを出土し、この地においてははるかな時代から先人たちが生活を営んできたことが判明いたしました。

本報告書が多方面に活用され、学術研究および文化財愛護思想の高揚ならびに、近隣における諸開発計画の協議調整に資することを期待いたします。

昭和62年3月

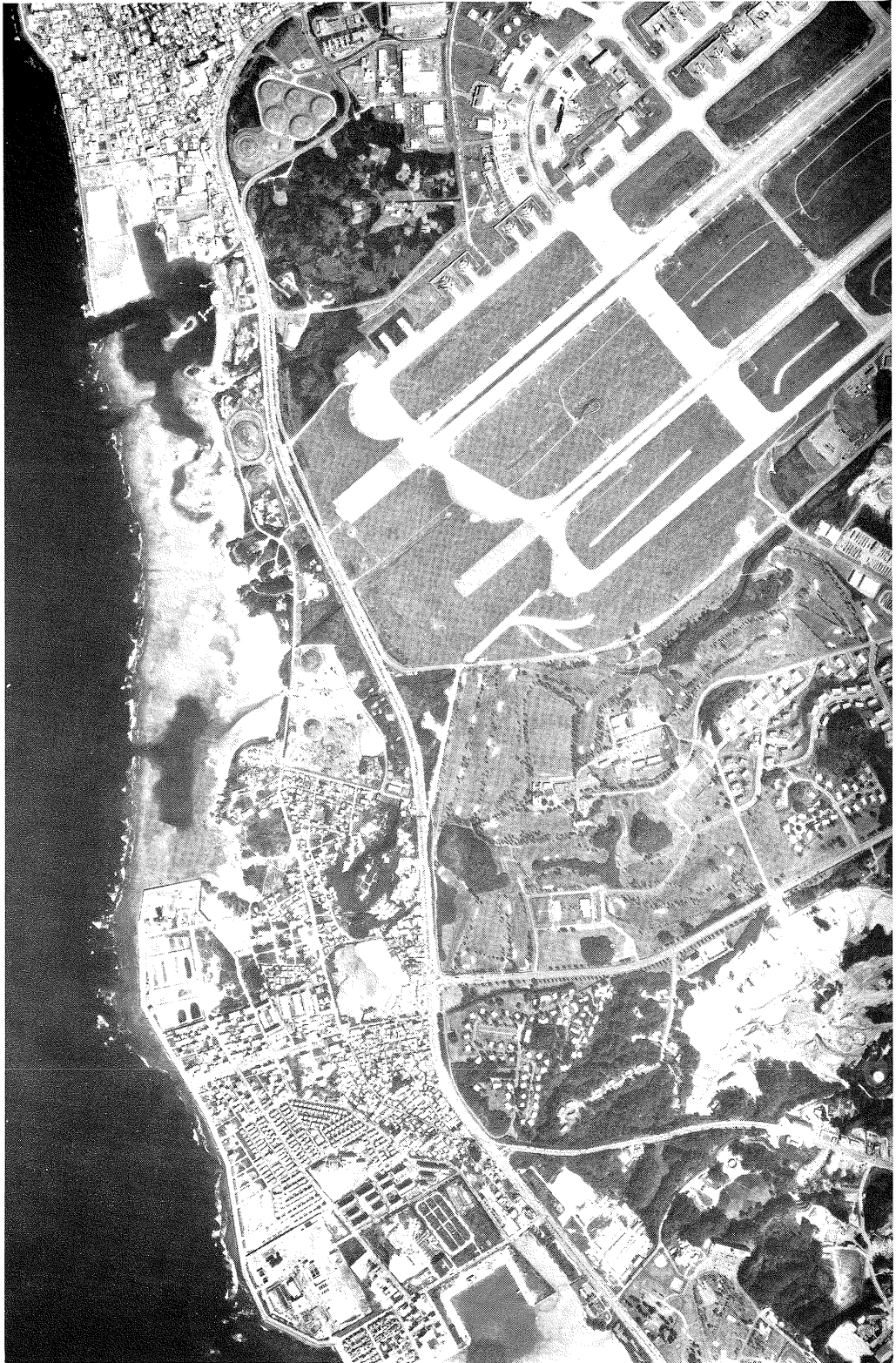
沖縄県教育委員会

教育長 池田光男





1945年の遺跡周辺の空中写真



1984年の遺跡周辺の空中写真

## 例 言

1. 本書は、沖縄県企業局による北谷浄水場への導水管敷設工事に伴う埋蔵文化財「砂辺サーク原遺跡」の緊急発掘調査の成果を記録したものである。
2. 発掘調査および調査報告書作成の経費について沖縄県企業局が負担し、沖縄県教育委員会（所管文化課）がこれを受託により実施した。
3. 発掘調査は昭和60年10月7日から12月4日の間実施された。
4. 輸入陶磁器・滑石製品・石質の同定は下記の方々による。記して謝意を表する次第である。

輸入陶磁器	大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）
滑石製品	下川達彌氏（長崎県立美術博物館）
石質	神谷厚昭氏（沖縄県立南風原高校教諭）
獣骨	渡辺 誠氏（名古屋大学文部助教授）
5. 本書に掲載した空中写真及び地形図・国土基本図は、国土地理院の発行のものを複製した。
6. 本書の執筆・編集は以下とおりである。

編 集	安里嗣淳・島 弘
執 筆	安里嗣淳……第I章・第II章・第IV章第2節h～j 島 弘……第IV章第1節第2節a～g・k 岸本義彦……第V章
7. 発掘調査で得られた資料はすべて沖縄県教育庁文化課資料室にて保管されている。

# 目 次

序

例言

本文

第I章 調査に至るまでの経緯及び調査体制	1
(1) 調査に至るまでの経緯	1
(2) 調査体制	1
第II章 砂辺サーク原遺跡の位置と環境	3
第III章 発掘調査の経過	5
第IV章 発掘調査の内容	7
第1節 層序と遺構	7
a. 層序	7
b. 遺構	8
第2節 出土遺物	16
a. 土器	16
b. 石器	24
c. 羽口	27
d. 鉄滓	28
e. 土製品	28
f. 滑石製品	29
g. 円盤状製品	31
h. 陶磁器	32
i. 南島須恵器	34
j. 沖縄産陶器	35
k. 自然遺物	39
黒燿石	39
獣骨	39
貝類	39
第V章 まとめ	43

## 挿図目次

第1図	北谷町の位置	
第2図	北谷町の遺跡分布	2
第3図	砂辺サーク原遺跡の位置	4
第4図	トレンチ設定及び発掘地区	6
第5図	石列遺構	8
第6図	土層断面図	9
第7図	Aトレンチ ピット群	11
第8図	Aトレンチ ピット群	12
第9図	Bトレンチ ピット群	13
第10図	Bトレンチ ピット群	14
第11図	集石遺構	15
第12図	大山式土器 尖底土器	19
第13図	鍋形土器	20
第14図	鉢形土器 不明土器 底部	21
第15図	石斧・すり石・たたき石	25
第16図	石皿	26
第17図	羽口	27
第18図	土製品	28
第19図	滑石製品	30
第20図	円盤状製品	31
第21図	沖縄産陶器	35
第22図	輸入陶磁器	36
第23図	南島須恵器	37

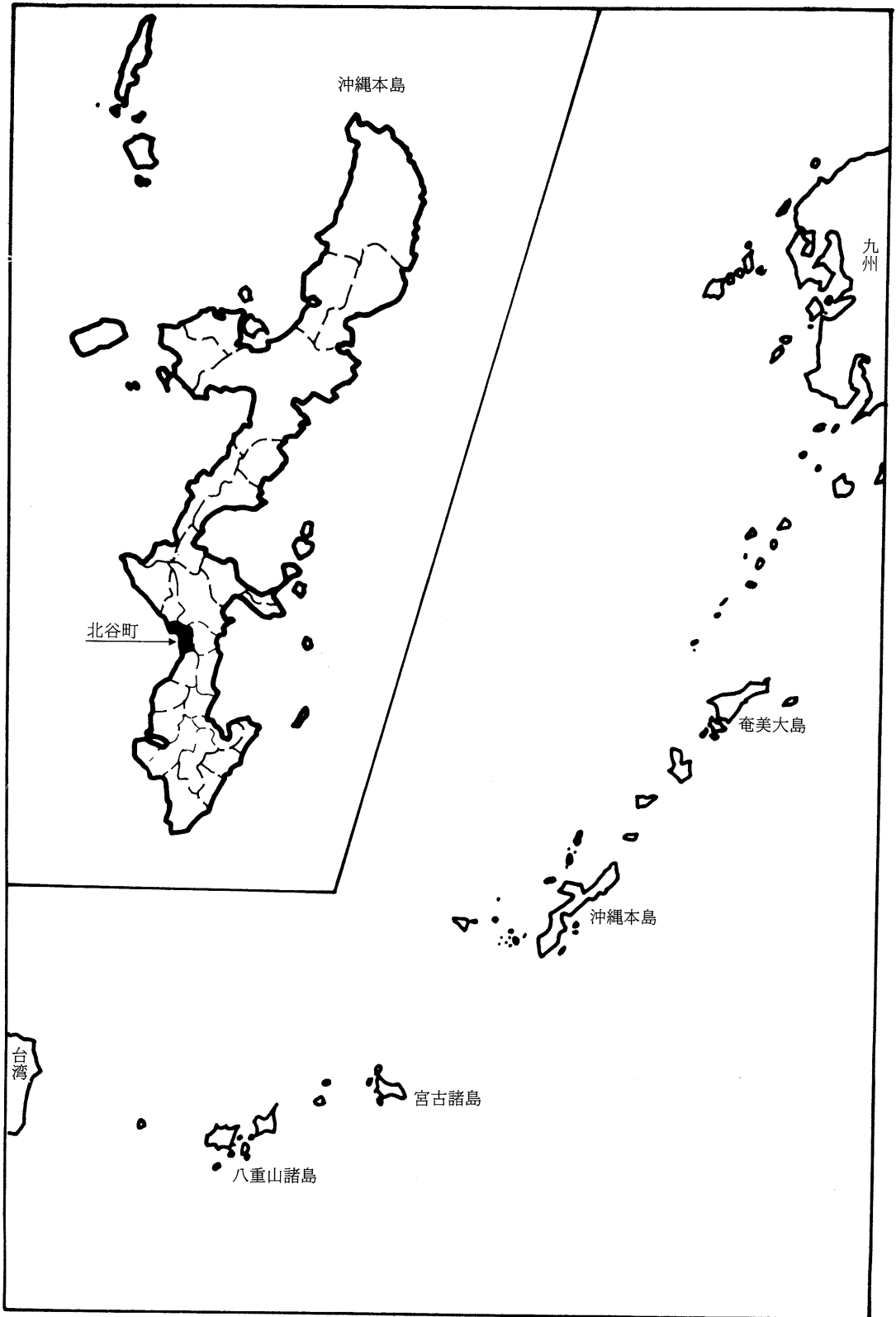
## 表目次

第1表	土器出土状況	16
第2表	P・H 出土状況	16
第3表	胴部分類表	16
第4表	P・H 胴部分類表	16
第5表	土器出土一覧	22
第6表	石器出土一覧	24
第7表	羽口出土状況	27
第8表	羽口出土一覧	27
第9表	滑石製品出土状況	29
第10表	滑石製品出土一覧	29

第11表	円盤状製品出土一覧	31
第12表	輸入陶磁器出土状況	38
第13表	沖縄産（上焼）出土状況	38
第14表	沖縄産（荒焼）出土状況	38
第15表	南島須恵器出土状況	38
第16表	獣骨出土状況	40
第17表	貝種別出土状況	41

## 図版目次

図版 1	集石遺構	15
図版 2	鉄 滓	28
図版 3	土製品	28
図版 4	黒耀石	39
図版 5	遺跡の遠近景	45
図版 6	砂辺海岸	46
図版 7	発掘風景	47
図版 8	層序 上：Aトレンチ、下：Bトレンチ	48
図版 9	遺物出土状況	49
図版10	ピット群 上：Aトレンチ、下：Bトレンチ	50
図版11	Aトレンチのピット	51
図版12	Bトレンチのピット	52
図版13	上：大山式土器、尖底土器 下：鍋形土器	53
図版14	上：鉢形土器 下：石斧、すり石	54
図版15	たたき石、石皿	55
図版16	羽口	56
図版17	滑石製品	57
図版18	円盤状製品	58
図版19	上：磁器 下：沖縄製陶器	59
図版20	上：沖縄製陶器 下：南島須恵器	60
図版21	獣 骨	61
図版22	獣 骨	62
図版23	貝 類	63
図版24	貝 類	64



第1図 北谷町の位置

## 第 I 章 調査に至るまでの経緯および調査体制

### (1) 調査に至るまでの経緯

沖縄県企業局は、沖縄本島の水資源開発の推進に伴う中南部への導水施設の整備の一環として、瑞慶山ダムから新設の北谷浄水場への導水管布設を計画した。同計画の段階で、北谷町砂辺の「FAC6076 陸軍貯油施設管理用道路」地内に埋蔵文化財が含まれている可能性があるとして、昭和60年6月28日付で沖縄県企業局より沖縄県教育委員会（文化課所管）に対し、「埋蔵文化財の有無について」の照会がなされた。

沖縄県教育委員会は同日付で、当該地域には埋蔵文化財「砂辺サーク原遺跡」が存在すること、工事を実施するのであれば、着手前に原因者（工事施工者）の負担において発掘調査が必要である旨を回答した。

これを受けて沖縄県企業局は、工事計画の変更は困難であるとして、昭和60年7月9日付で文化庁長官に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、「埋蔵文化財発掘通知」を提出した。これについて沖縄県教育委員会は文化庁の指導により、同年7月10日付で「工事着手前に発掘調査を実施」するよう通知した。

その後の協議により、調査に要する経費は沖縄県企業局が負担し、調査は沖縄県教育委員会が受託により実施することが確認された。

両者による委託契約は同年10月5日付で締結され、同月より発掘調査が開始された。

### (2) 調査体制

発掘調査および調査報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体 委託者 沖縄県企業局 局長 金城作一  
受託者 沖縄県教育委員会 教育長 米村幸政

#### 事業所管

沖縄県教育庁文化課 課長 比嘉賀幸  
課長補佐 西平守勝

#### 事業事務

文化振興係々長 大城真幸（60年度）、小橋川順市（61年度）  
主事 本郷公朗、照喜納玲子（61年度）  
主事補 仲村ともこ（60年度）

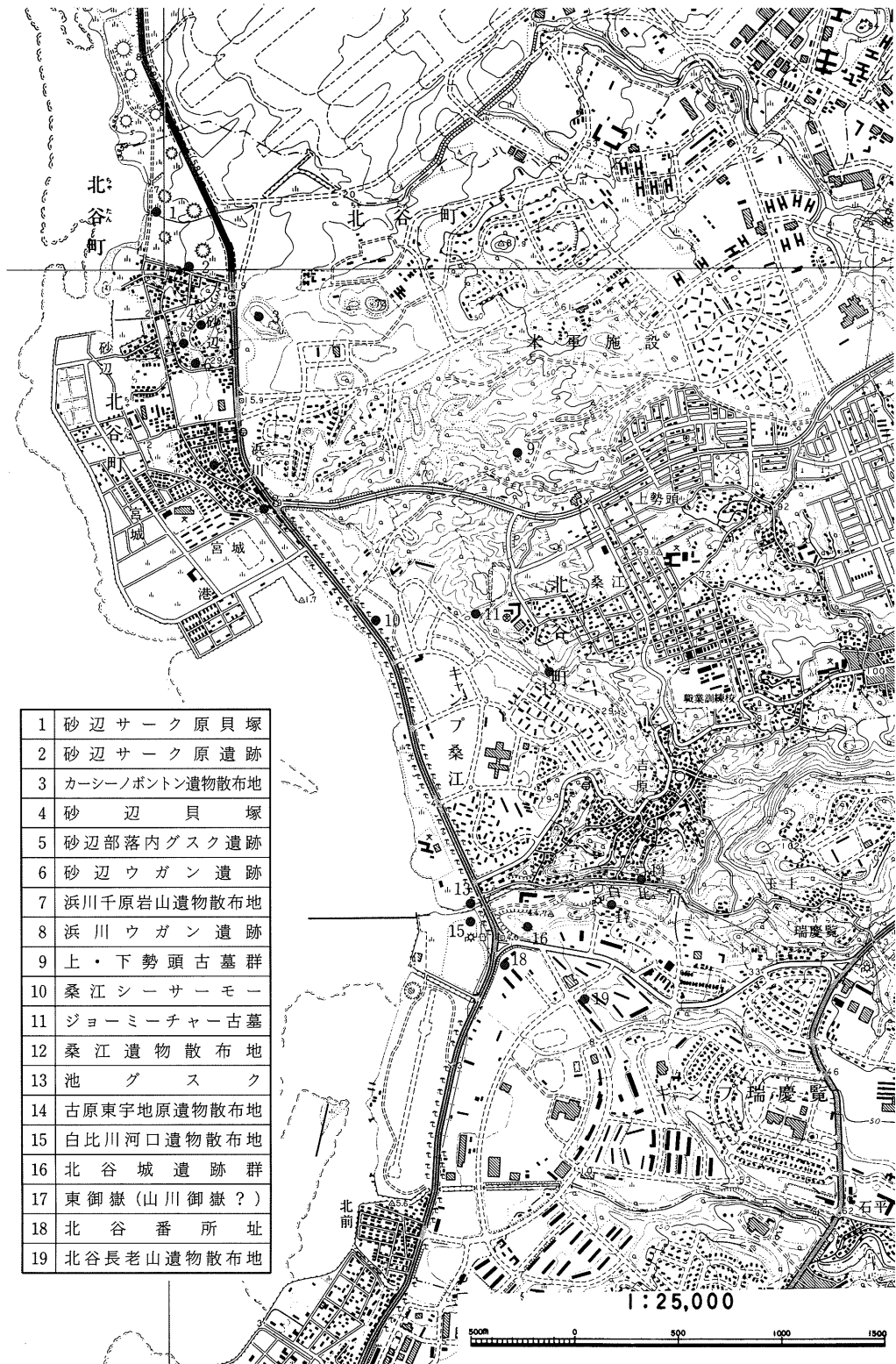
#### 事業総括

埋蔵文化財係々長 安里嗣淳

#### 発掘調査員

専門員 岸本義彦、島 弘、大城 慧、金城亀信、松川 章  
専門員 座間味政光、花城潤子。  
補助員 奥村真由美（鹿児島大学学生）





第2図 北谷町の遺跡分布

#### 発掘調査作業員

比嘉トヨ、宮平トミ子、亀島キミ、仲地真佐子、宮平佳子、松田ハツ子、比嘉光子、宮平弘子、砂辺スミ子、田場栄子、比嘉ナヲ、照屋鶴子、宮平ミツ子、仲村渠シゲ子、喜屋武艶子、宮平律子、泉川みすず。

#### 資料整理作業員

(洗浄、注記、実測、トレース等)

比嘉優子、城間千栄子、新垣千恵子、池原直美、大城ますみ、瑞慶覧尚美、平良利枝。

## 第II章 砂辺サーク原遺跡の位置と環境

砂辺サーク原遺跡は沖縄本島中部の西側、北谷町字砂辺小字加志原、村内原にある。一帯は北谷部落の北端に位置し、ちょうどアメリカ軍基地と部落とを区切る道路(「FAC 6076 陸軍貯油施設管理用道路」)を含む両側に分布する。この道路は国道58号の砂辺バス停留所付近から海岸にかけて取り付けられた米軍と民間の共用道路で、これに沿って基地の金網フェンスが続いている。遺跡は国道からこの道に入って50メートル程の地点から始まり、基地の最初の通用門付近に及ぶ。

地形は国道を挟む後背地に石灰岩の丘が広がり、これが次第に高くなって沖縄本島中部の脊梁部に連なっていく。この丘の一部は国道を越えて、遺跡の南側に舌状の丘陵となって突出している。遺跡一帯も石灰岩地帯でその上層は概ね赤土層(マージと称され、石灰岩の風化土壌であるという説が一般的である)が覆っている。遺跡地はこれらの丘より一段低い平坦地に形成される。遺跡形成面の地表は西の海岸に向かって次第に低くなり、やがて海浜に至る。遺跡の標高は東端で約17m、西端で約9mである。この石灰岩層の下層には一般に不透水層があり、その境目が地表に接するあたりで湧泉となる。この一帯にもいくつかの湧泉が見られる。

付近の遺跡分布について見ると、北方海岸に沖縄新石器時代最古の遺跡である野国貝塚B地点、隣接して弥生相当期の野国貝塚があり、すぐ南隣の舌状丘陵には縄文時代の砂辺貝塚、南方海岸にはグスク時代の北谷グスクがある。西方約350mには東シナ海があり、海岸近くには遠浅の珊瑚礁が広がる。



第3図 砂辺サーク原遺跡の位置

### 第三章 発掘調査の経過

今回の発掘調査は、1985年10月7日から12月4日の2ヵ月間実施した。調査地区は砂辺集落と嘉手納空軍基地との境界である「F A C 6076陸軍貯油施設管理用道路」が調査発掘の対象地となった。

調査地区が一般道路のため安全対策には、十分に留意したが大型の車両が通過するたびに発掘調査を中断することもたびたびみられた。嘉手納空軍基地に接しているため、軍用機からの騒音・エンジン調整音に悩まされる発掘調査でもあった。

トレンチ設定は、第4図に示すように導水管敷設工事に係る部分に対応する形で設置されることが余儀なくされ国道58号線側にAトレンチ、海岸側へBトレンチを設定した。Aトレンチは東からA<sub>1</sub>A<sub>2</sub>……A<sub>12</sub>、Bトレンチも同様に東側よりB<sub>1</sub>B<sub>2</sub>……B<sub>19</sub>、と4mごとに区画を行った。発掘面積はAトレンチ46.9m<sup>2</sup>、Bトレンチ59m<sup>2</sup>の総計105.9m<sup>2</sup>である。

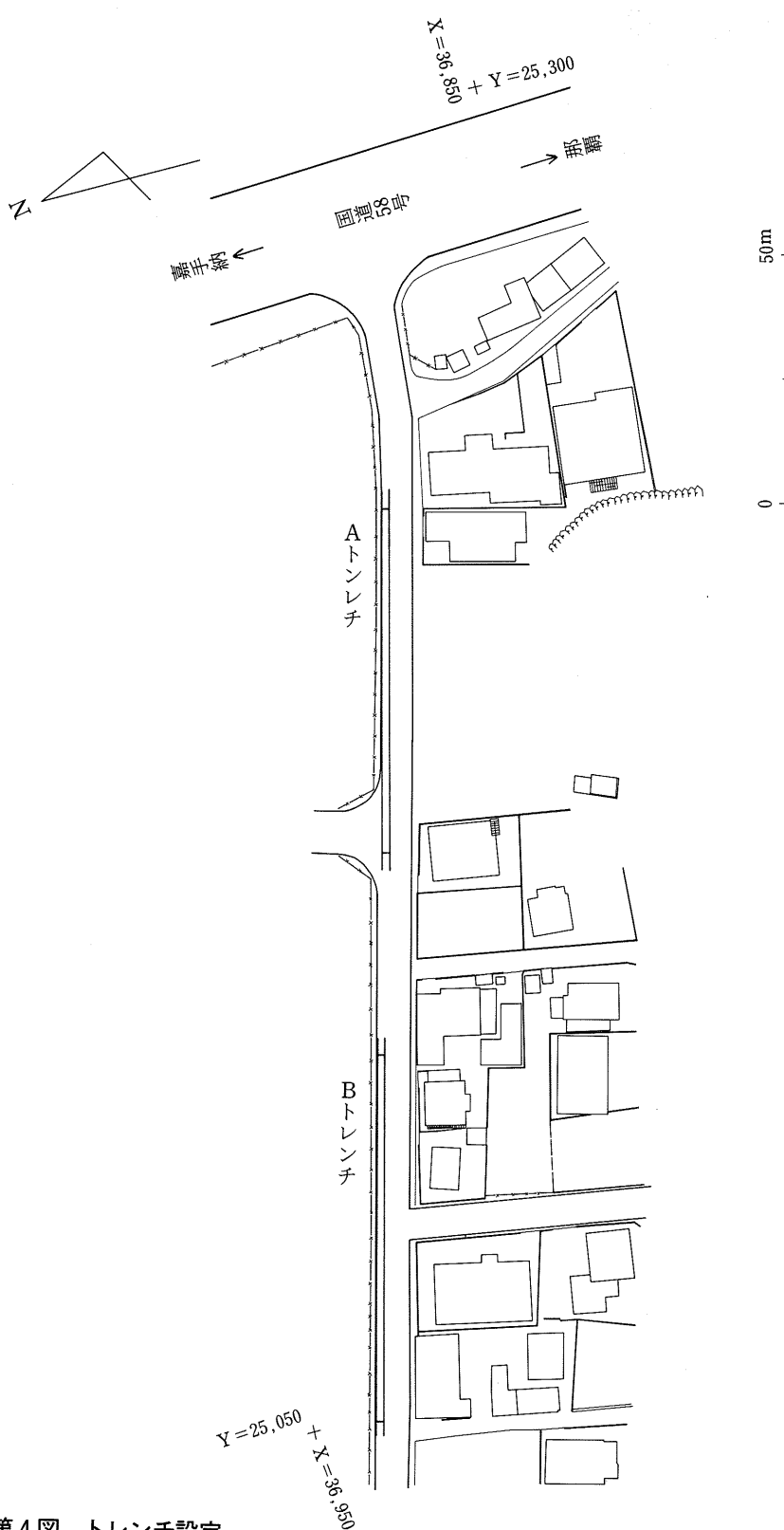
発掘調査は、Bトレンチより始め、続いてAトレンチへと進めた。Bトレンチにおいては遺物包含層の上部にみられるアスファルト及びコーラルを機械（バックフォア）を用いて除去作業より開始した。

その結果、B<sub>6</sub>～B<sub>11</sub>にかけては、ピットが地山面に早くも検出されたが、B<sub>12</sub>～B<sub>17</sub>にかけて遺物包含層の広がりが見られ、その下位の地山面にピット群が及ぶものと予想をたてた。発掘は地山面の整理を行いピット群を明確にするるとともに、遺物包含層にも取りかかった。遺物包含層は、全体的に東から西への堆積が見られるが、Bトレンチ付近では厚さ40cmを示した。また、遺物包含層やピット内からは、グスク時代の古い時期に相当する資料が得られ（グスク土器・玉縁白磁・滑石・南島須恵器等）ピット群も当該期に比定されるものと解した。

Aトレンチもまた同様に機械（バックフォア）を用いて表土（アスファルト・コーラル）の除去作業より始めた。本トレンチでは、Bトレンチにみられた遺物包含層は確認されず、ピット群が地山全面に検出された。

ところで、ピットの発掘の方法としては、ピットを長軸に半裁、断面観察を行い残りの半分を発掘する順序で行った。ただ、残念なことは、プラン等の確認は調査地区の制約があり把握することは困難であった。

両トレンチとも、発掘終了後に壁面実測・写真撮影を行い、12月4日に調査を終了した。



第4図 トレンチ設定

## 第Ⅳ章 発掘調査の内容

### 第1節 層序と遺構

#### a. 層序

今回、発掘したトレンチの層序は、基本的には地山ラインや周辺地形から推察すると国道58号側より海岸へ緩やかに堆積したものである。旧表土については、戦後、米軍による整地作業や道路工事等によって削られ不明である。また、攪乱部が地山まで及ぶところもみられた。

ところで、A・Bの両トレンチの層序は対応するもので、一括して取り扱う。側壁面は両トレンチの典型的な部分を掲載した。以上、各層別に記述する。

第Ⅰ層：約0.5cmの厚さのアスファルトとその下位に敷き詰めたコーラルの礫層である。

コーラルは、約30cmの層厚で全面に延びる。

第Ⅱ層：茶褐色土層で攪乱層である。Aトレンチでは、薄く遺物も僅少である。それに比してBトレンチでは、遺物もかなり得られたが、砲弾の破片や現・近代のものがみられた。

第Ⅲ層：層色は黄褐色土層で、Bトレンチのみに確認された。本層は第Ⅱ層と第Ⅳ層に阻まれた形で薄くレンズ状に堆積がみられた。遺物は、グスク土器等が得られたが、沖縄製陶器なども検出された。

第Ⅳ層：茶褐色土層でAトレンチでは薄く、Bトレンチで主に確認された未攪乱層である。本層はグスクの古い時期に相当し、遺物量も本層が最も多く得られた。BトレンチにおいてB<sub>12</sub>～B<sub>17</sub>の範囲にみられたが、それ以外では、第Ⅴ層の地山と接する。

第Ⅴ層：層色は淡い茶褐色土層でBトレンチのみに確認された。B<sub>15,16</sub>ではトレンチを縦位に切る形で溝状に急激に落ち込む状況を呈していた。

第Ⅵ層：赤褐色土層（方言名、マーザ）で、いわゆる地山である。この地山面に、ピット群が検出された。

## b. 遺構（ピット群・集石・石列）

今回、発掘した結果、遺構はピット群・石列・集石の3種類の遺構が確認された。ピット群については、グスク時代に属するものと思われ、A・Bの両トレンチにおいて検出された。ただ、残念なことは、発掘面積に限度があり、全体への広がり把握することは出来なかった。また、プラン等の平面形をおさえることも困難をきわめた。以下、ピット群より略述する。

### ピット（Aトレンチ）

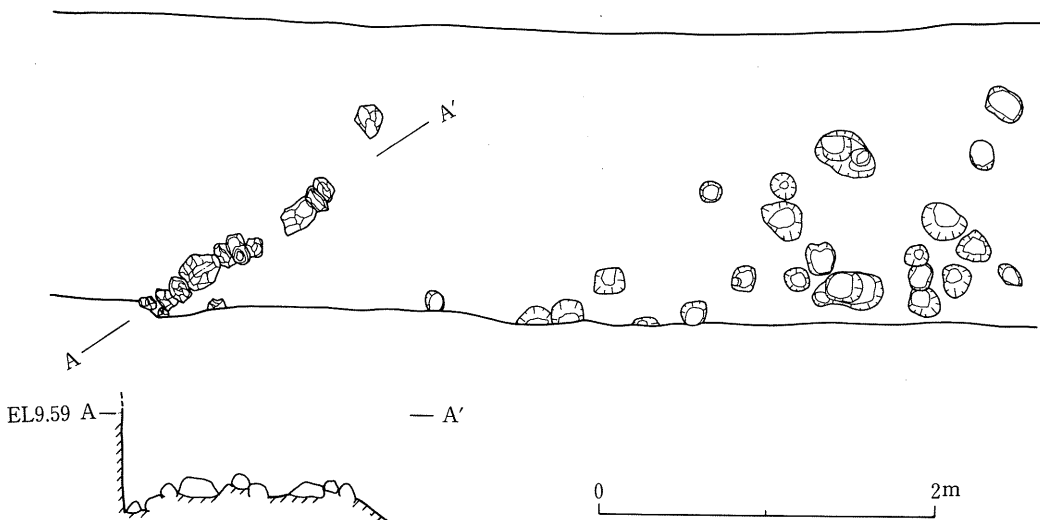
Aトレンチのピット群は、第7図～第9図に示したものである。平面形は円形・楕円形にほぼ収まるが、ピットの大きさは、最大のもので約63cm、最小6cm、平均23cmである。ピットの深さは、不統一である。国道側では、地山ラインが高く根石として、岩盤の石灰岩を利用したものがみられた。また、ピットNo62は、本トレンチで最も大きなピットであるが、石皿を根石として用いたもので、注目に値するものである。

### ピット（Bトレンチ）

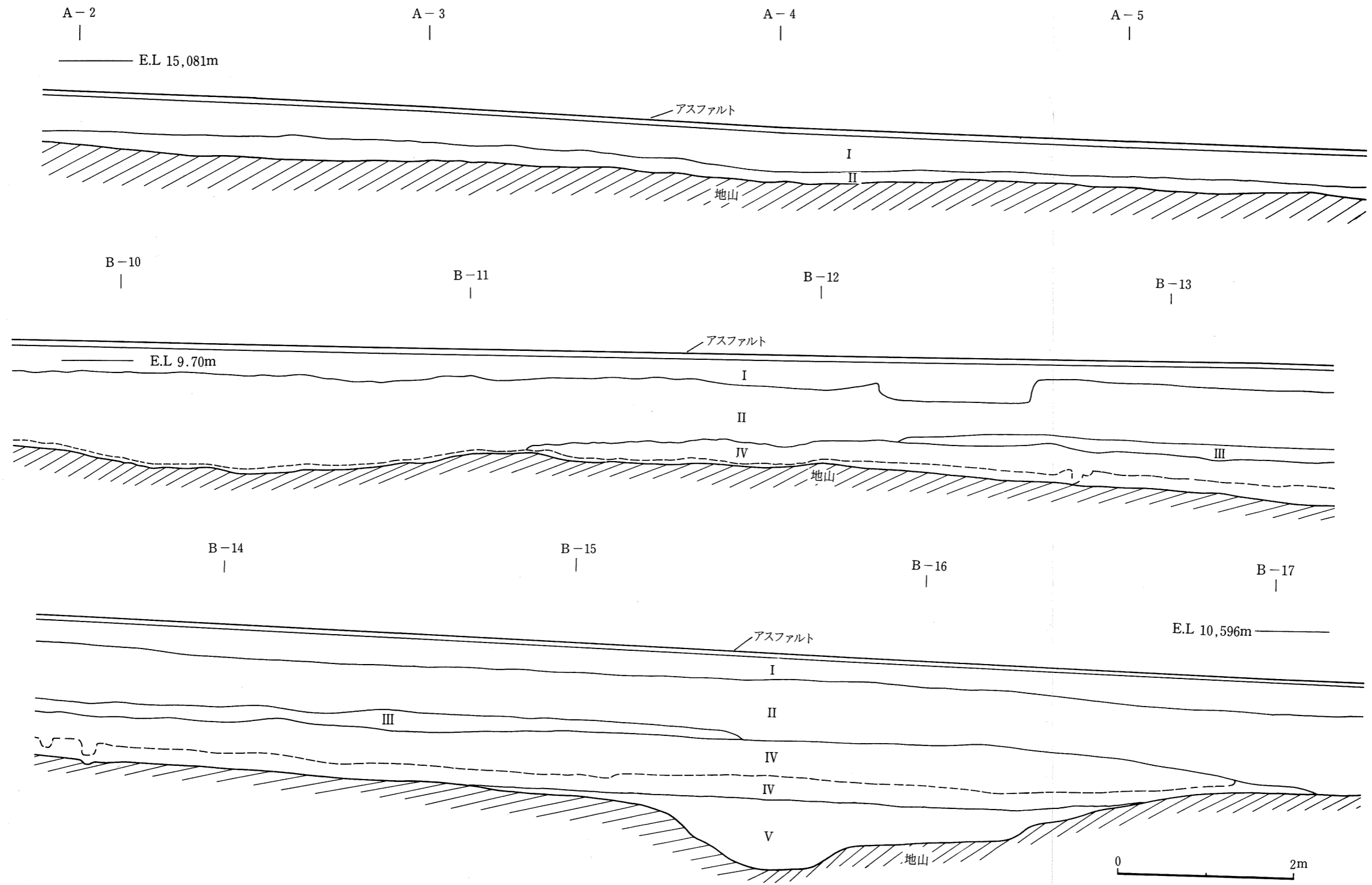
本トレンチもAトレンチ同様に、平面形は、ほぼ円形に収まる。ピットのサイズは、最大42cm、最小7cm、平均20cmを測る。B<sub>6</sub>～B<sub>8</sub>のピット群は、方形プランの可能性を有しているが、前記したとおり、トレンチ掘りのため正確に把握することは出来なかった。

### 石列遺構

下図に示したもので、B<sub>7</sub>グリッドの北壁から南東側に延びる形、人頭大の石灰岩の並びがみられた。発掘当初は、ピット群に付随する施設と解したが、調査が進むにつれ、第IV層よりも上位に有り、グスク時代の構築物と捉えきれなかった。時期については、今後類例資料の追加を俟ち検討したい。

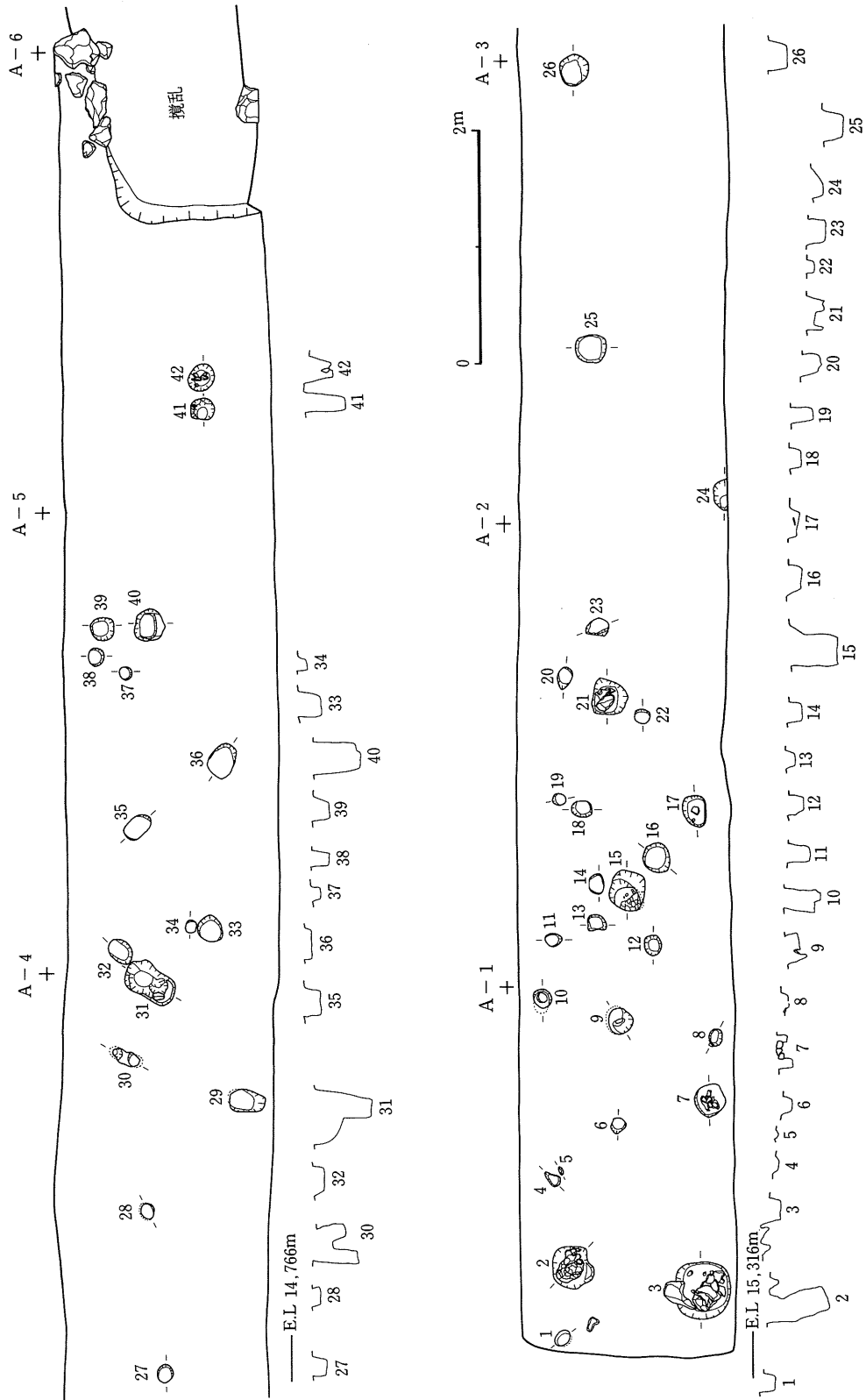


第5図 石列遺構

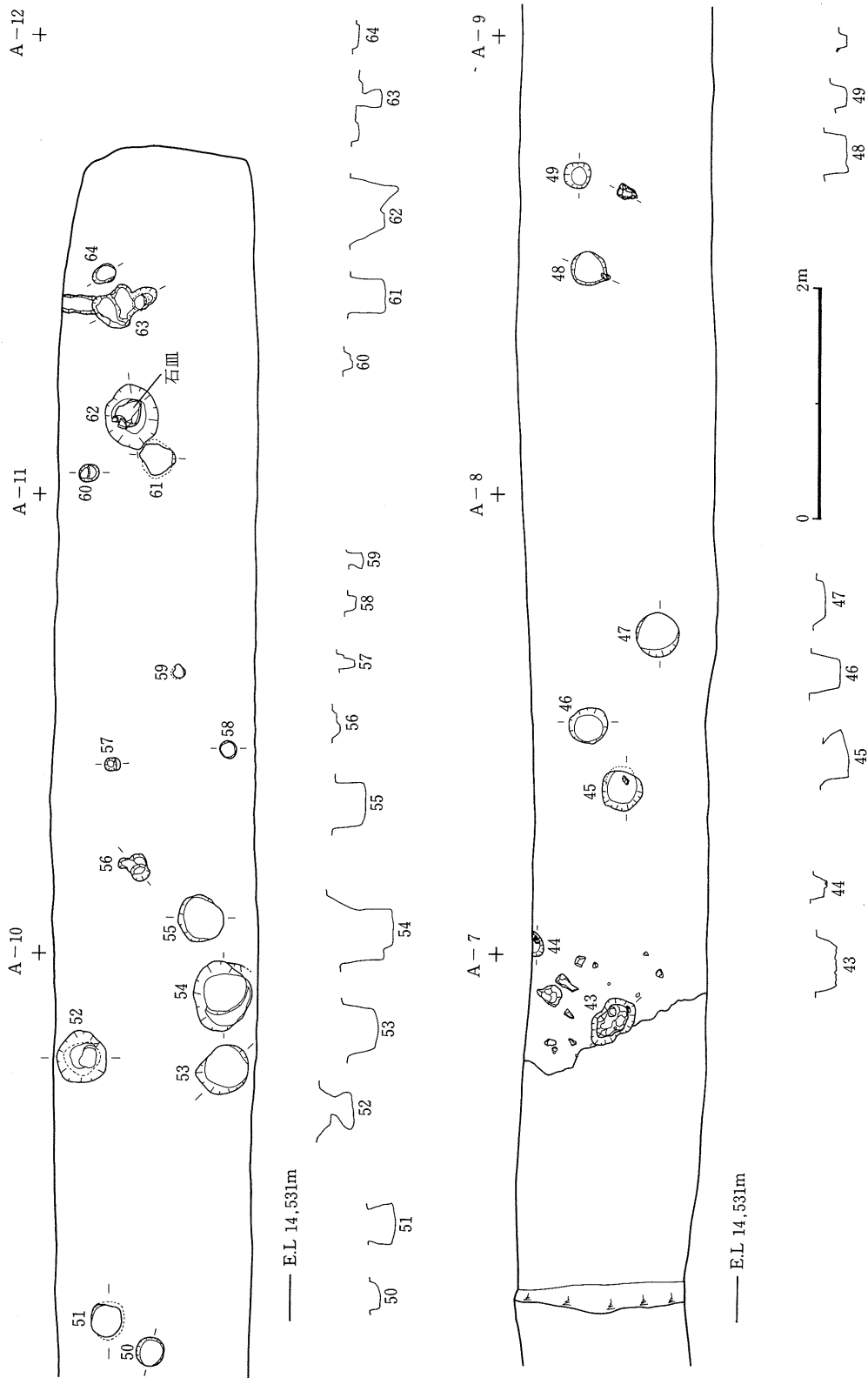


第6図 土層断面図

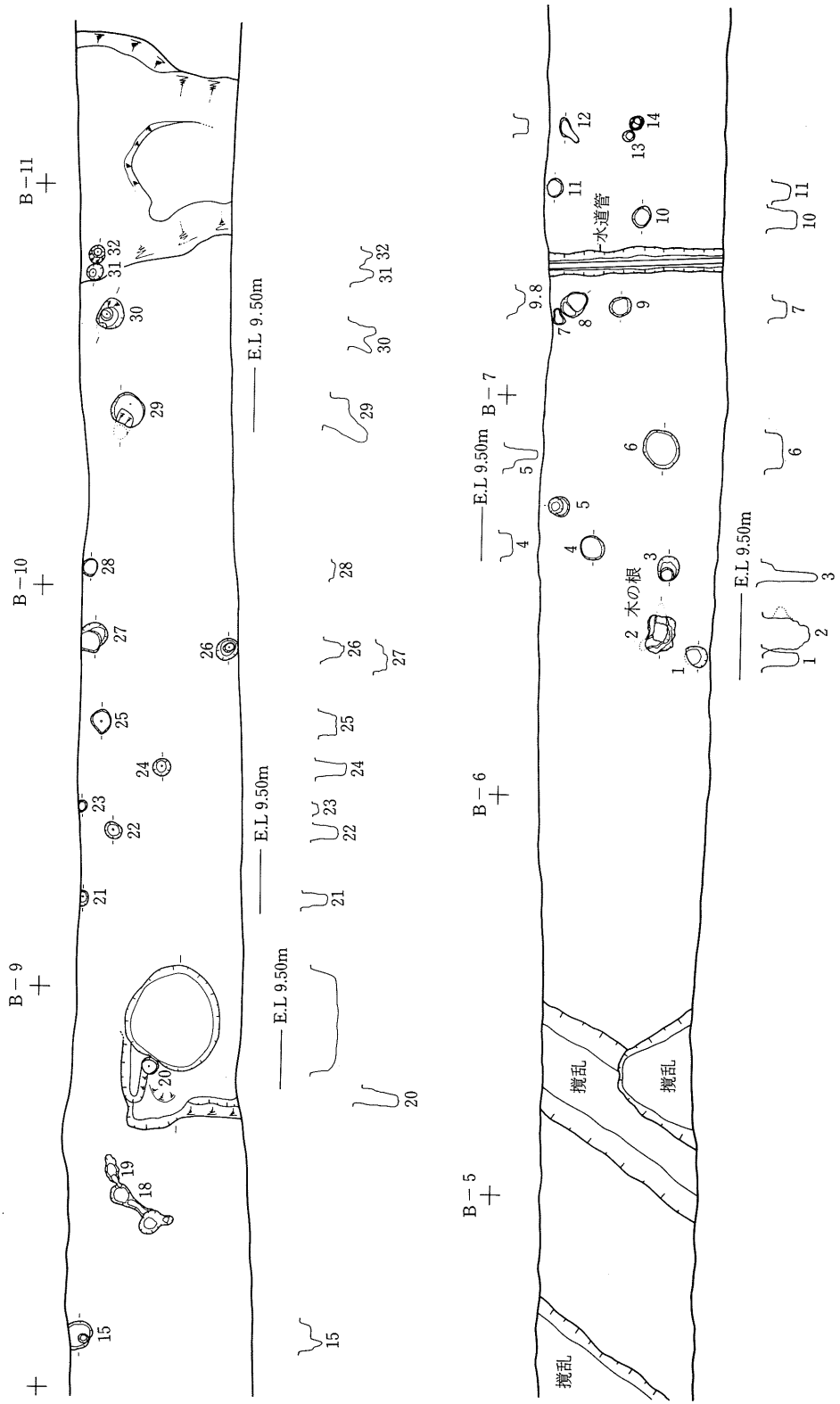




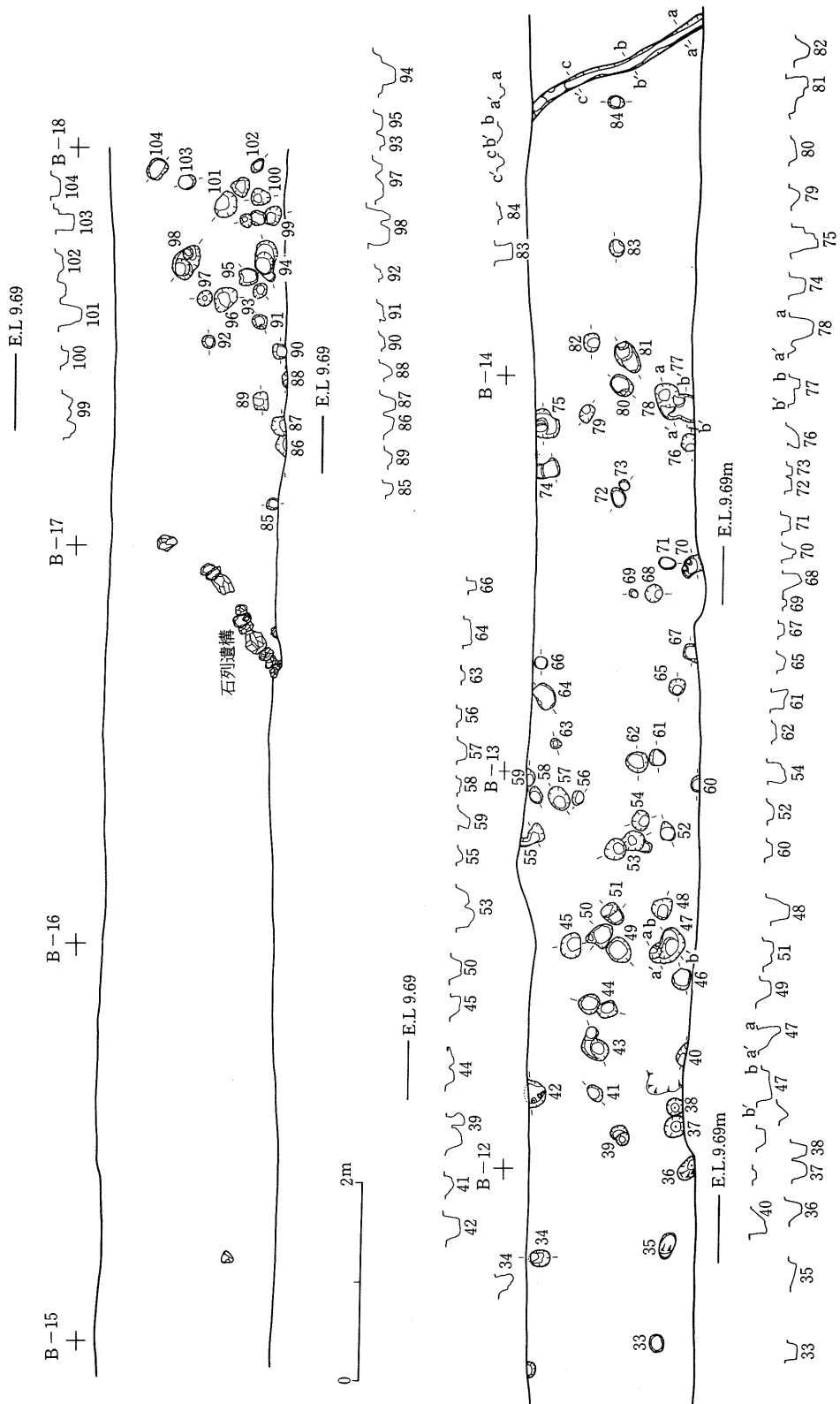
第7図 Aトレンチピット群



第8図 Aトレンチピット群



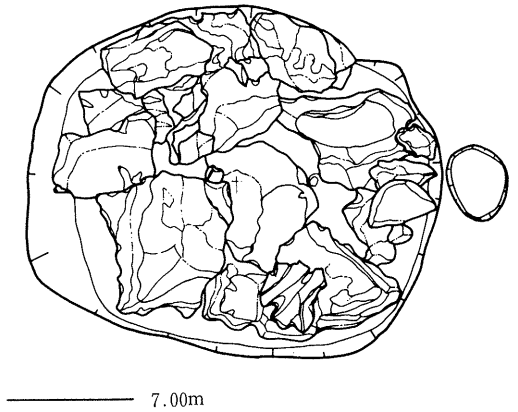
第9図 Bトレンチピット群



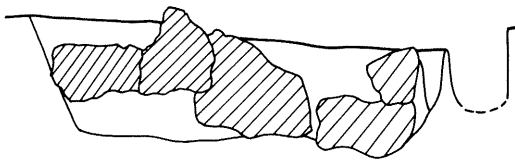
第10図 Bトレンチピット群

### 集石遺構

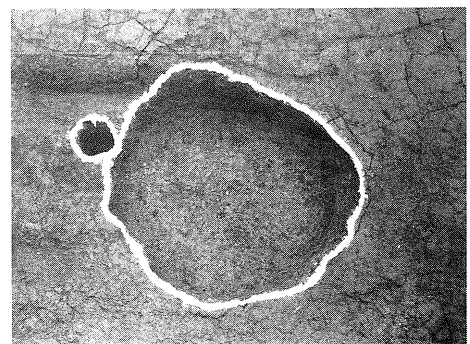
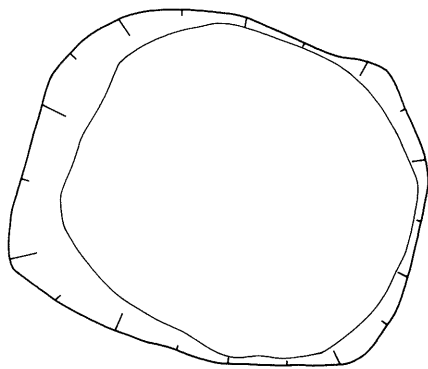
下図に示したもので、B<sub>9</sub>グリッド付近に検出された。遺物は検出されず大きな石灰岩の岩を積みこんだものである。集石内の土質は黒褐色を呈していた。本遺構周辺のピット群と関連して、なんらかの意味を有していたのか不明である。本資料についても、性格・時期については今後の課題として検討したい。



1. 検出状況



2. 遺構内の状況



3. 完掘状況

0 2m

第11図 集石遺構

図版1 集石遺構

## 第2節 出土遺物

### a. 土器

土器は、第1表に示すように総数592点得られた。復元可能な土器は得られず、すべて小破片である。その殆どが、グスク時代に帰属するものである。その中で、貝塚時代の土器も若干得られた。グスク土器は鍋形が最も多く、次いで、鉢形がみられた。グスク土器の器種の中で、不可欠な壺形土器は得られなかった。また、口径推算可能な資料について図上復元を試みた。

ところで、グスク土器の分類については、豊見城伊良波東遺跡<sup>注1</sup>を参考にした。但し、胴部資料については、新たに、2種類追加した。分類基準は下記のとおりである。

- ①：砂質で手触りがザラザラするもの。
- ②：泥質で手触りが滑らかなもの。
- ③：泥質で器面にポーラスがみられるもの。
- ④：滑石混入が顕著で滑らかなもの。

以下、前期土器より記述するが、掲載した資料の観察は第5表に示した。

第1表 土器出土状況

時期 部位 分類 層序	前期土器		後期土器		グスク土器							P・H			試掘	計
	口縁部		底部		口縁部		胴部			底部		口縁部	胴部			
	A	B	A	B	A	B	A	B	不明	A	B	B	A	B		
II			2	1	3	7	37				1					51
III					3		44	2								49
IV	1		4		34	2	410			2	4	7	6			470
不明	1							12								9
計	2		6	1	40	9	491	14			3	4	7	6	9	592

第2表 BトレンチP・H  
出土状況

番号	部位	口縁部
8		1
34		1
43		1
85		1

第3表 胴部分類表

トレンチ 分類 層序	Aトレンチ				Bトレンチ				Aトレ Bトレ 不明				試掘	計	
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D			
II	4	2		1	3	12	14	8							44
III					4	19	4	17	1				1		46
IV		2			84	214	117	79							496
不明											2		1	9	12
計	4	4		1	91	245	135	104	1	2			2	9	598

※試掘, 1985

第4表 P・H胴部分類表

トレンチ 分類	A-PH					B-PH						計	
	2	17	49	52	55	7	14	26	42	51	82		
A								1				1	2
B		2	1				1						4
C	1				1	1			1				4
D				2						1			3
計	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	13

### 前期土器

第12図に示したもので、本遺跡唯一の沖縄貝塚時代前期に帰属する大山式土器である。本型式は宜野湾市大山<sup>1</sup>貝塚<sup>2</sup>の土器を標式とする。口唇部はやや外傾し平坦に成形している。文様は左から右に横位に3条を施す。胎土に石灰質砂粒・石英を混入。暗茶褐色を呈す。また、器面は表面ナデ調整、裏面には擦痕がみられる。

### 後期土器

第12図2～4に示したもので底部資料である。それらは、立ち上がりの形状から底面より開くものと(同図2)、底面より一端ストレートに立ち上がり開くものと(同図3～5)の2種に分けることができる。

前者は底面を平坦に成形、それから胴部へ向って開く形状を呈している。胎土は微細で表面灰褐色、裏面橙褐色である。また、本標品は底面を円盤状に作り、立ち上がる胴部と接合する手順が窺える資料でもある。

後者に属する資料は底面を瘤状に成形したもので、同図3の底面は平坦面が顕著である。ナデ調整、橙褐色を呈する。同図4・5は丸味を有する底面でナデ調整である。胎土は微細である。同図4は暗茶褐色で同図5が表面橙褐色、内面黒褐色である。

### グスク土器

本遺跡の主体をなす土器群である。他のグスク時代相当期の遺跡から得られる土器と基本的な差異はみられなかった。器種の判定できたものは、鍋形・甕形の2器種であった。その他の土器は小破片のため傾きが一定せず器種を知りえることは困難であった。ここでは不明土器として一括して取り扱う。以下、鍋形土器より記述する。

### 鍋形土器

第13図に特徴的なものを図示した。口縁部に縦位もしくは横位に把手を貼り付けたもので、鏝を巡らすものが得られた。

同図1～8は縦位に把手を有するものである。把手は定形化した方形状のもの(同図1)とやや周辺部に丸味を帯びたもの(同図2～8)とがある。胎土は同図1が手触りがザラザラとするAタイプで、同図2～4には滑石の混入がみられる。

同図9・10の資料は横位に把手を貼り付けたものである。同図9は口縁直下に把手を有し、そこからやや内傾ぎみに成形している。器表面にはポーラスがみられる。ナデ調整を施こしているが裏面は擦痕が観察できる。同図10には把手のみの資料で正面観を楕円状に成形したものである。胎土は泥質で、ナデ調整が施こされている。

同図11・12は横位に鏝を有するもので、前者は器表面に混入物が浮き出し手触りがザラとする。後者の標品は泥質で器表面にポーラスがみられる。

同図17～18はその器形より鍋形に含めたものである。口唇部を平坦にするもの(同図

13～同図16)と丸味を成形するもの(同図17・18)とに分けられる。同図16の製品は図上復元を試みたものである。内湾器形で口唇部に明瞭な平坦面を作りだしている。胎土に滑石を混入し、手触りが滑らかである。

### 鉢形土器

第14図1～5に示したものである。口縁部がやや弱く外反する器形である。同図1は口唇部を平坦に成形、胎土は乳白色の粒が散見できる。色調は表裏とも暗褐色である。

同図2～5の資料は口唇部を舌状に成形したものである。同図3・4は口唇部から内側に断面を逆三角形に幅広く成形したものである。ナデ調整であるが部分的に擦痕がみられる。同図5は図上復元を試みたものである。他の土器と比べると薄手の土器で器表面に凹凸がみられる。表側は暗茶褐色と黒褐色である。裏面は橙褐色を呈する。また、断面観察すると頸部に幅約2.1cmの粘土帯を巡らし、口唇部を0.7cmの粘土紐を被せる技法が窺える好資料である。

### 不明土器

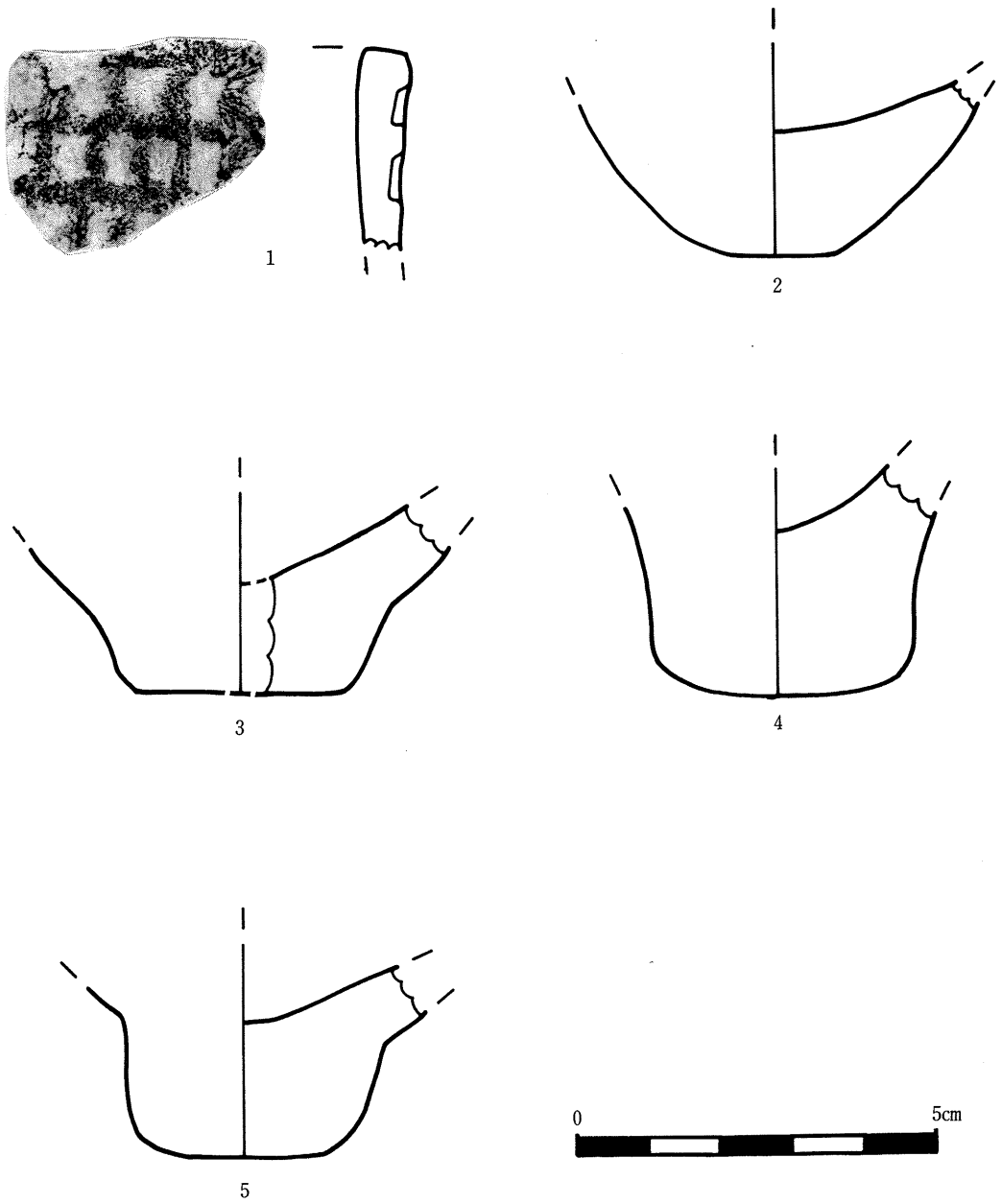
不明土器としたのは、小破片のため傾きの一定しないもので器種・器形の推測が困難なものである。第14図6～9に示した。

第14図6は口唇部を丸く成形(玉縁状に)貼り付けたものである。器表面はナデ調整である。この手の土器は、稲福遺跡<sup>ま3</sup>で出している。同図7は、口唇部を欠失した頸部資料である。粘土を逆T字に貼り付けている。同図8は口唇部を平坦に成形している。粘土帯がはみ出しており、雑な作りである。同図9は口唇部を丸く作って弱く外傾させている。器表面にポーラスは見られない。

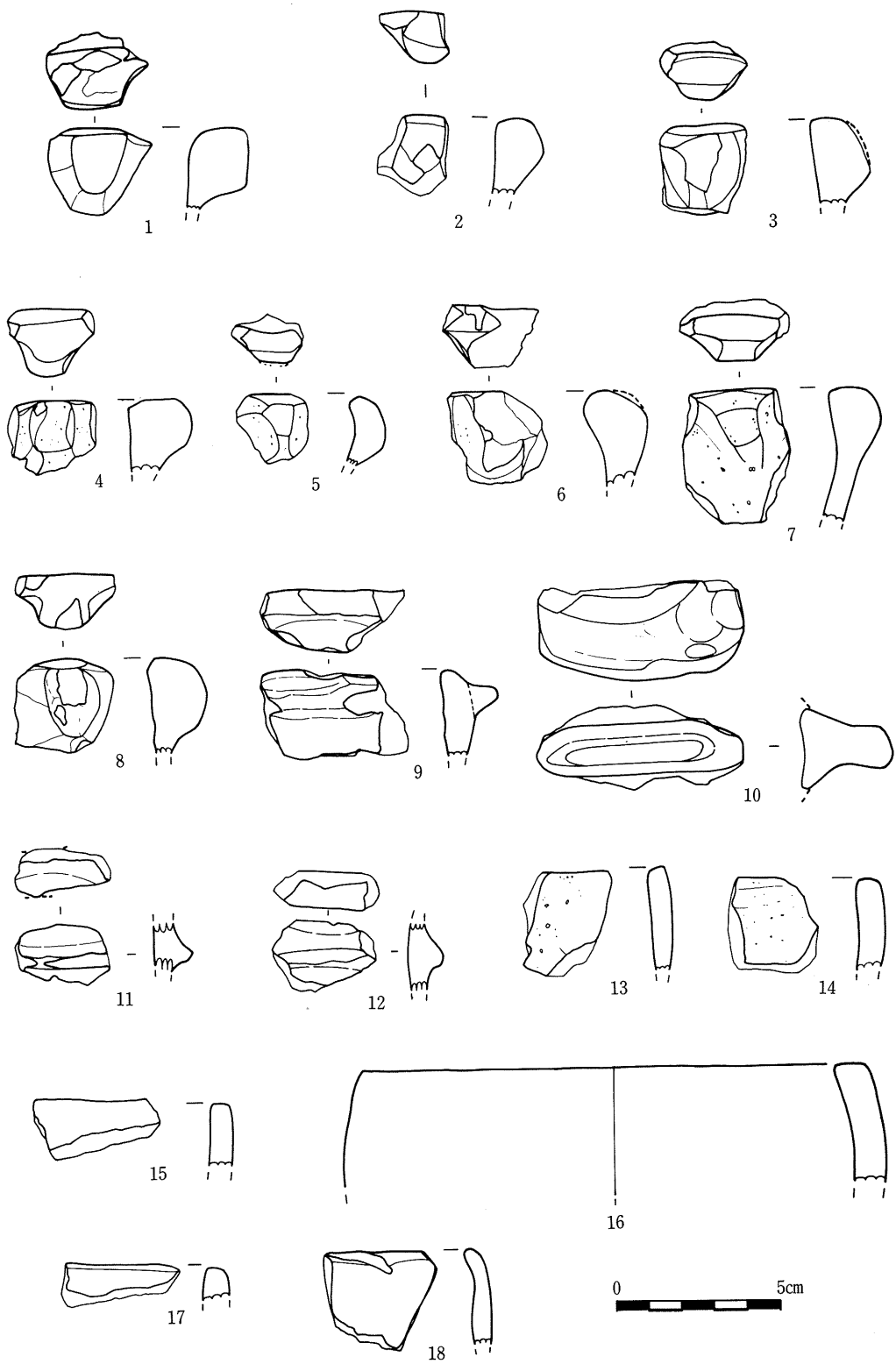
### 底部資料

第14図10～12の3例を図示した。同図1は底面より鋭角に立ち上がるものである。色調は淡い橙褐色で、混入物に赤色粒・黒色鉱物が含まれている。胎土は泥質で触れると粉末が手につく。同図2・3はたちあがりに丸味を有するものである。前者は立ち上がりを篋による削りが顕著である。その上部はナデ調整を施している。胎土には滑石を混入、後者は表裏ともナデ調整である。裏面はナデ消しが徹底しておらず擦痕がみられる。

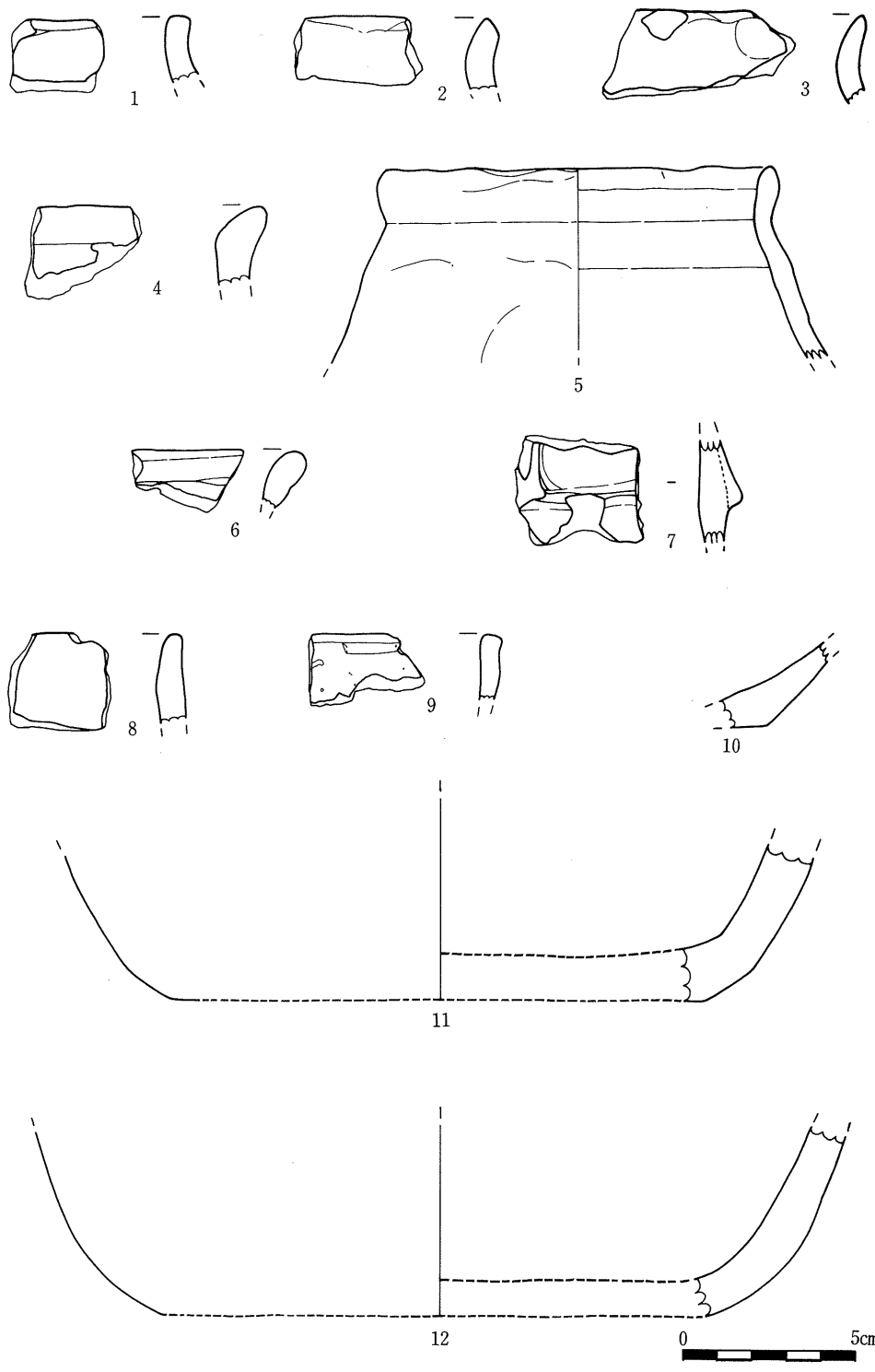




第12図 大山式土器 1、 尖底土器 2～5



第13図 鍋形土器



第14図 鉢形土器 1~5、不明土器 6~9、底部10~12

第5表 土器出土一覧

挿図 番号	グリッド 層序	器 種	胎 土	器面 調整	混入物	色調	法量 (cm)				ポーラス		
							口径	器厚	底面の 厚さ	底径	有	無	
第12図1	B-16 IV	深鉢形		擦痕	石灰質砂粒	暗茶褐色		0.5					
” 2	B-15 IV	底部	精細	ナデ		灰褐色 橙褐色			1.7	1.5			
” 3	”	底部		”	ガラス質鋳物	橙褐色		0.8	1.5	3.9			
” 4	B-16 IV	底部		”	ガラス質鋳物 石灰質砂粒	橙褐色 暗茶褐色		0.9	2.3	3.7			
” 5	B-14 IV	底部		”	ガラス質鋳物	橙褐色 黒褐色		0.8	1.8	3.3			
第13図1	B-15 IV	鍋形	A	”	ガラス質鋳物 石英	暗茶褐色		0.6					○
” 2	B-16 IV	”	D	”	赤色粒 滑石	”							○
” 3	不明 II	”	”	”	ガラス質鋳物 滑石	暗橙褐色		0.6				○	
” 4	B-15 IV	”	”	”	滑石 赤色粒	”		0.7					○
” 5	B-12 IV	”	C	”	石灰質砂粒 赤色粒	暗茶褐色						○	
” 6	B-15 IV	”	”	”	石灰質砂粒	”						○	
” 7	B-16 IV	”	”	”	石灰質砂粒	橙褐色		0.9				○	
” 8	B PH43	”	”	”	石灰質砂粒 石英	暗茶褐色		0.6				○	
” 9	B-14 IV	”	”	ナデ 擦痕	石灰質砂粒	橙褐色 赤褐色		0.7				○	
” 10	”	”	B	ナデ	赤色粒 ガラス質鋳物	暗茶褐色							○
” 11	”	”	A	”	石英 滑石	赤褐色		0.7					○
” 12	B-13 IV	”	C	”	石灰質砂粒	暗茶褐色		0.6				○	
” 13	B-12 II	”	”	ナデ 擦痕	石灰質砂粒	石英	”		0.5				○
” 14	B PH34	”	”	ナデ	石灰質砂粒	橙褐色		0.6				○	
” 15	B-14 IV	”	D	”	滑石	橙褐色 灰褐色		0.8					○
第13図16	B-13 III	鍋形	B	ナデ	石灰質砂粒	橙褐色	15.3	0.7					○
” 17	B-13 IV	”	”	”	”	”		0.7					○
” 18	B-14 IV	”	”	”	石灰質砂粒 石英	”		0.5					○
第14図1	B-13 IV	鉢	B	”	石灰質砂粒	赤褐色		0.7					○

挿 図 番 号	グリッド 層 序	器 種	胎 土	器面 調整	混 入 物	色 調	法 量 (cm)				ポーラス	
							口径	器厚	底面の 厚 さ	底径	有	無
第14図2	B-18 II	鉢	B	ナデ	石灰質砂粒 赤色粒	暗茶褐色		0.6				○
” 3	B-14 IV	”	”	”	赤色粒	橙褐色		0.6				○
” 4	B-14 III	”	”	ナデ 擦痕	石灰質砂粒 赤色粒	赤褐色		0.9				○
” 5	PH10	”	”	”	石灰質砂粒	暗茶褐色 赤褐色	11.1	0.5				○
” 6	B-15 IV	不 明	C	ナデ	石灰質砂粒 黒色鉍物	橙褐色		0.6			○	
” 7	B-16 IV	”	B	”	石灰質砂粒 赤色粒	”		0.7				○
” 8	B-15 IV	”	”	”	石灰質砂粒	暗茶褐色		0.6				○
” 9	B PH85	”	C	”	”	”		0.5			○	
” 10	B-6 II	底 部	B	ナデ ヘラ	石灰質砂粒 黒色粒	淡橙褐色		0.5	0.9		○	
” 11	B-14 IV	”	D	”	滑 石 石 英	赤褐色 淡橙褐色		1.2	1.3	15.4		○
” 12	”	”	B	”	石灰質砂粒 石 英	”		1.1	1.0	15.4		○

## b. 石器

今回の調査で得られた石器の中で、器種の判別できたのは、石斧2点の他、すり石・敲き石、石皿の各1点の4種類、計5点である。すべて実用品で非実用品は1点のみみられなかった。それらの出土状況、石質・法量等は第6表に示した。以下、器種別に略述する。

### 石斧

第15図1・2に示したものである。同図1は刃部面を破損した小型のバチ形の磨製石斧である。両側面はコーナーを有するほど入念な研磨仕上げである。同図2は刃部片の資料で丁寧に研磨を施し滑沢を有する。

### すり石

同図3に示したもので、現状から推すると破損前は球状を呈したものと思われる。表面・両側面に磨面がみられる。特に、右側面は滑沢を有するほどかなり使用されていたものと考えられる。また、下端部には敲打痕もみられる。

### 敲き石

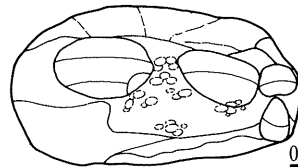
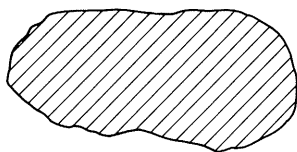
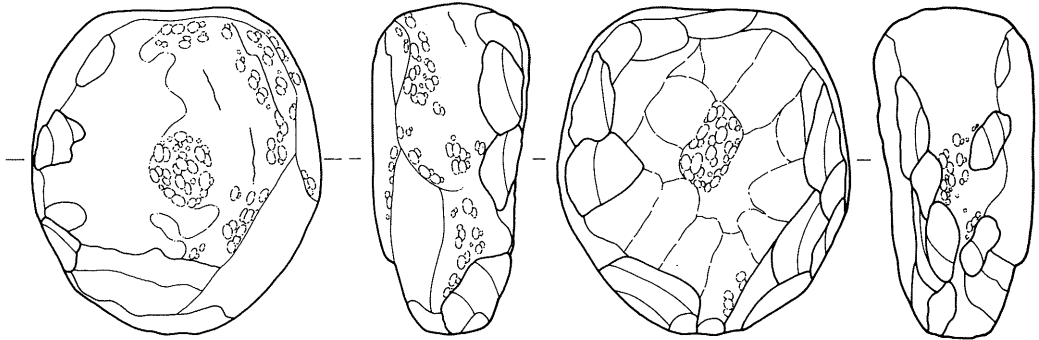
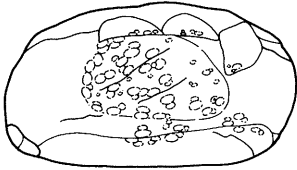
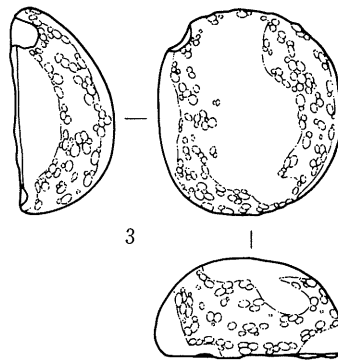
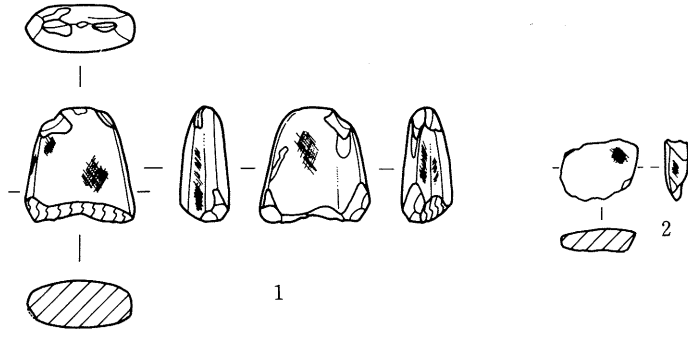
同図4に図示したもので、手に持つと重量感のある敲き石である。表裏面には凹部、下端部に敲打痕と磨面がみられ兼用されたものと思われる。また、裏面全体は使用時の衝撃による割面であるが、その後も中央に凹を有するほど用いられたことが窺える。

### 石皿

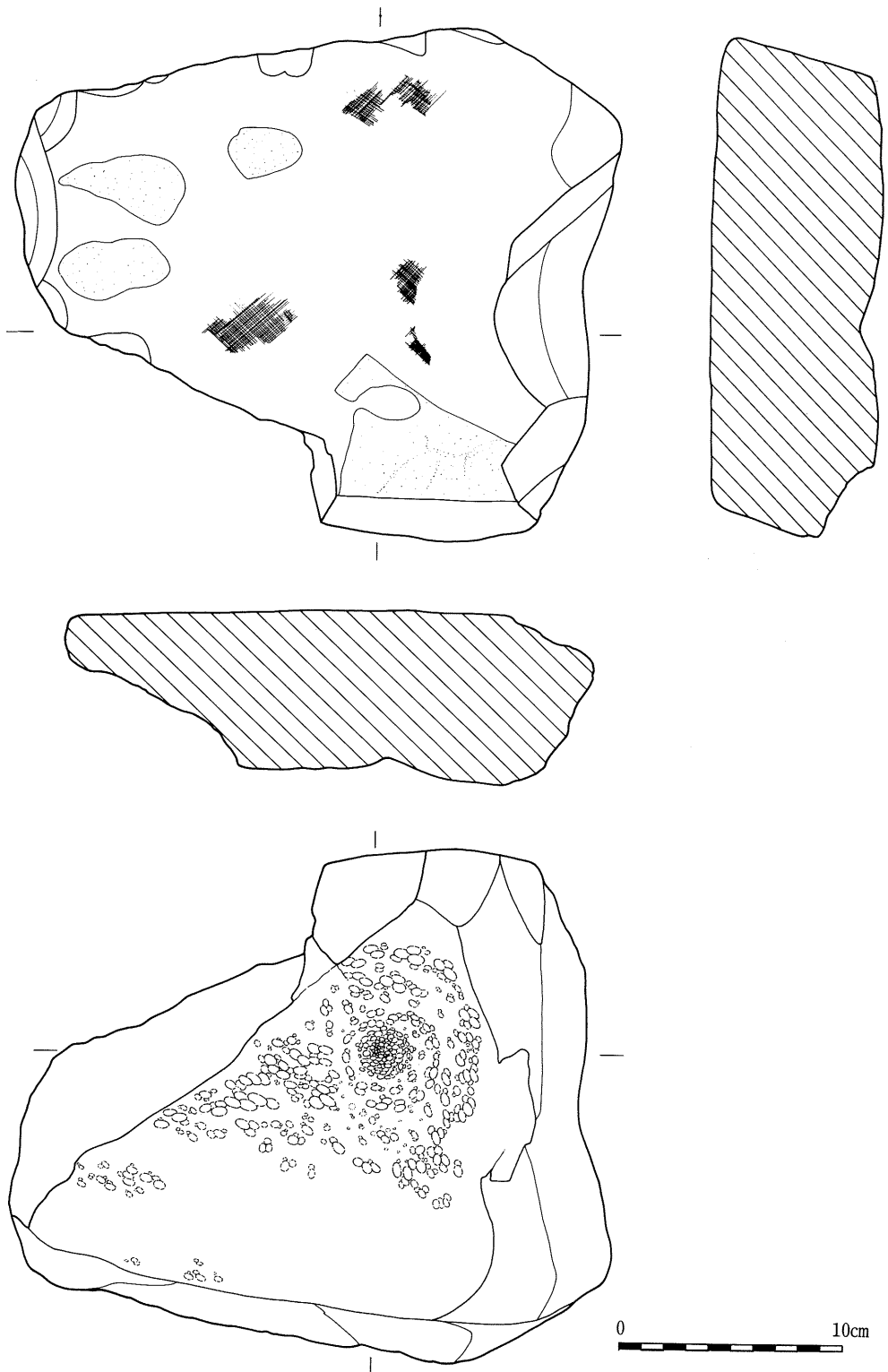
第16図に示したもので、Aトレンチピット62より得られた。石皿の機能が停止してからも根石として用いられたようである。表面全体は滑沢を有するほど磨面がみられる。側縁部は表面と比べて磨面は顕著ではない。また、裏面上面は使用による敲打痕がみられる。

第6表 石器出土一覧

挿 図	グリッド	層序	器 種	法 量 (cm, g)				石質	産 地
				長さ	幅	厚さ	重量		
第 15 図 1	A 2	II	石 斧	3.4	3.2	1.4	23.0	緑色片岩	北谷以北 慶良間諸島
” 2	A 8	II	”	1.8	2.1	0.7	3.4	”	”
” 3	B 15	IV	磨 石	5.9	5.5	2.9	144.0	”	”
” 4	Aトレ PH31		凹 磨 石 石	9.6	8.6	4.6	625.0	”	”
第 16 図	Aトレ PH62		石 皿	22.0	29.0	7.6	6000	砂岩	金武以北、東海岸に 多くみられる



第15図 石斧、すり石、たたき石



第16図 石 皿



c. 羽 口

下図に特徴なものを示した。全形の窺える資料はなく、すべて破片で30点得られた。全体形は円筒形になるものと思われる。概ねにして、外面は淡い茶褐色、内面は赤褐色である。胎土は手触りのザラザラする砂質である。これらの特徴は、グスク時代の遺跡から得られる羽口と基本的な違いはみられない。以下、資料について簡記する。

同図1～3は、端部の資料で、外面端部付近には溶着物が付着し、気泡がみられる。また、端部付近は直接火を受けたものとみられ黒色に変色している。同図1は、溶着物の顕著な資料で部分的に盛り上がっている。同図2は唯一磁気化を帯びる標品である。内外径を推算してみると、内径約3.4cm、外径6cmを測る。同図3は、外面において溶着物の剥落が大きくみられる。

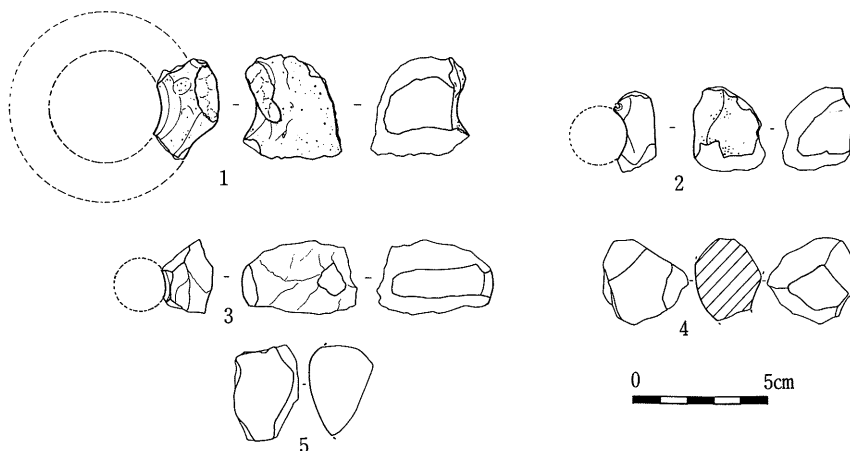
同図4・5は、体部の資料である。厚さを端部のものと比較するとやや厚手に形成されている。図4は外面に細かい気泡がみられる。また、色調も外面灰褐色を呈し、同図5の標品よりは端部に近い資料かと考えられる。

第7表 羽口出土状況

層序 トレンチ	I	II	III	IV	PH62	計
A		0 / 4				0 / 4
B				1 / 24	1 / 0	2 / 24
計		0 / 4		1 / 24	1 / 0	2 / 28

第8表 羽口出土一覧

挿 図	グリッド	層 序	部 位	溶着物	胎 土	法 量 (cm)			器 色
						外 径	内 径	厚 さ	
第17図 1	B14	IV	端部	有	砂質	7.0	4.0	3.0	黒赤 褐色
” 2	A.PH5		”	”	”		2.1	1.0	”
” 3	B15	IV	胴部	”	”		1.8		”
” 4	B13	”	”	無	”				灰赤 褐色
” 5	B14	”	”	”	”				”

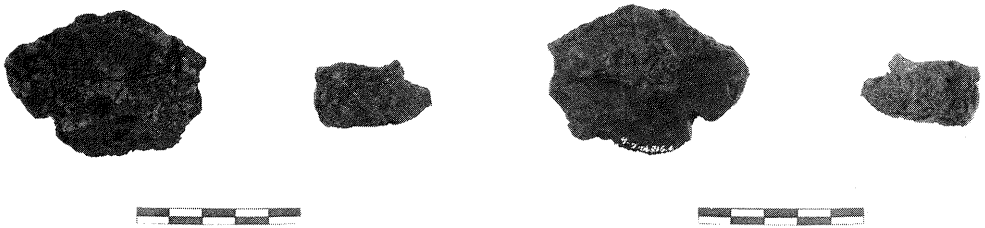


第17図 羽 口

#### d. 鉄 滓

下図の写真に示したもので、確認できたのは僅か2例のみである。両標品とも器表面に大小の細かい気泡を有している。表面長軸にやや弧状のカーブ面を持ち凹凸がみられない。一方、裏面は剝離面で凹凸が顕著である。色調は全体的に灰褐色を呈するが、部分的に赤味を帯びた茶褐色と黒褐色である。

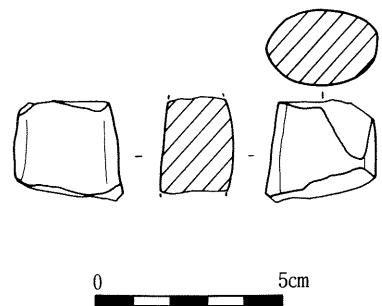
ところで、鉄滓には「製練滓」と「鍛冶滓」の2種類ある。本資料は専門家の同定を得てないが、その諸特徴より「鍛冶滓」の可能性が強い。



図版2 鉄 滓

#### e. 土製品

右図に示したもので、両端部を欠失した破損品である。正面観は逆台形、横断面は楕円形である。また、縦断面をみても緩やかなカーブを描いている。表面には浅い溝が数条縦走しているのが認められる。色調は全体的に橙褐色を呈し、胎土は泥質である。焼成は良好。それらの特徴より推察すると全体形は円柱状の製品になるものと思われる。B<sub>14</sub>グリットの第IV層から出土したものである。



第18図 土製品



図版3 土製品

## f. 滑石製品

滑石製品には、石鍋の破片やそれに2次加工を施したものが16点得られた。全形の窺えるものはなく、すべて破片である。全体的には銀色もしくは青味を帯びた滑石を用いたものである。煤の付着したものはみられなかった。その内、特徴的なものを第19図に示した。以下、個々の標品について簡記する。

同図1～3は石鍋の破片である。同図1は銀色を帯びる口縁部資料である。内外面とも丁寧に研磨成形がみられる。同図2は口縁部に対して横位に鏝を巡らしたものであると思われる資料である。器表面には研磨調整がみられる。同図3は銀色を帯びた滑石を用いた底部付近の資料である。外面には、ノミ痕が縦位に約0.9cmの幅でみられ、内面を研磨仕上げである。

同図4～7は、石鍋の破片に2次加工を施したものである。同図4は、口縁部破片を用いた転用品で外面約0.8cmの幅のノミ痕、内面は研磨調整が施されている。2次加工は破損面に研磨を施こし、さらに、内面中央部に穿孔初期の痕がみられる。

同図5は外面に約0.9cmのノミ痕、内面研磨調整が施された胴部資料を用いた転用品である。断面を表裏面からの切断痕が途中まで施され、表面には2条の浅い切り込みがみられる。つまり、裏面から3条目で切断過所を決定し、途中まで切断し折ったものと思われる。同図6は長軸上部を方形に削り出した標品である。上面観を長方形に側面観はT字条に成形している。研磨が全体に施こされている。下川達彌氏の御教示によれば「石錘」の可能性が有ることである。

同図7は口縁部を用いたもので、正面4条、下部に2条の鋭い刻目がみられる。用途については不明で類例資料の追加を俟って検討したい。同図8は石鍋のどの部位を用いたか不明で、形態を棒状に成形したものである。正面観・横断面は長方形で周辺に入念な研磨を施こしている。また、上端部は切断面も観察されるが、丁寧に研磨を施こしている。用途不明である。

第9表 滑石出土状況

層序 トレンチ	I	II	III	IV	不明	計
A						
B			1	14	1	16
計			1	14	1	16

第10表 滑石製品出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	石 鍋		器 面		重量 (g)
			部 位	転用品	外面	内面	
第19図1	B13	IV	口縁部		研磨	研磨	10.1
〃 2	B15	〃	〃		〃	〃	4.1
〃 3	B13	〃	底 部		ノミ	〃	57.1
〃 4	B15	〃	口縁部	研 磨 孔	〃	〃	60.4
〃 5	B12	III	胴 部	切り込み	〃	〃	26.9
〃 6	B14	IV	口縁部	研 磨	研磨	研磨	25.7
〃 7	〃	〃	〃	切り込み 研 磨	〃	〃	44
〃 8	B18	〃		〃	〃	〃	1.1



第19図 滑石製品

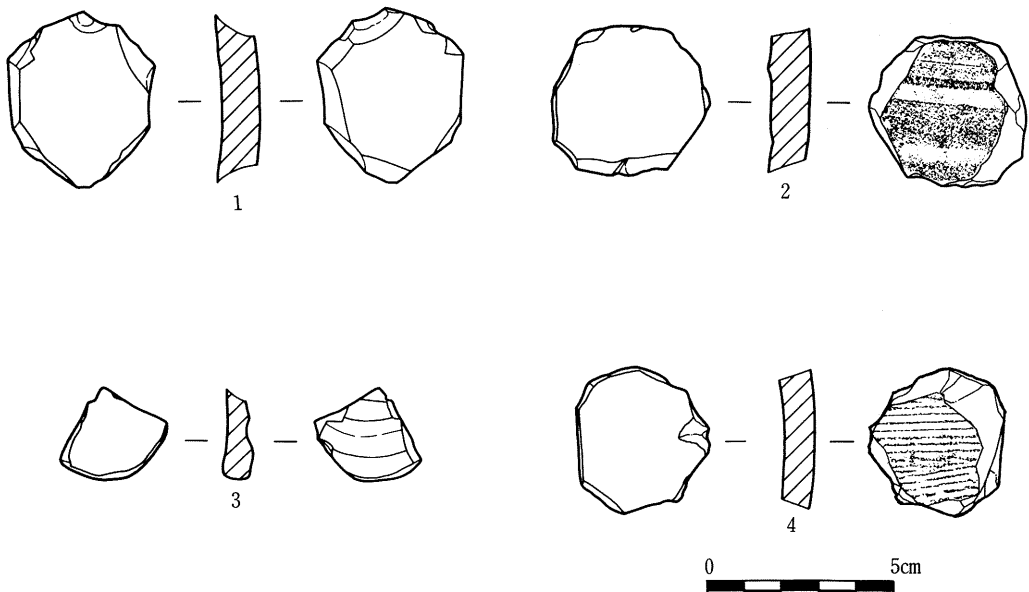
g. 円盤状製品

下図に示した4例が得られた。いずれも沖縄製陶器の転用品である。本標品については、上原静氏によって、1次製品・2次製品に大別され、系統的に論じられている<sup>註4</sup>。用途については、遊戯具として捉えられている。本遺跡の製品は、全体的に細かい打割はみられず、荒く調整され円盤状に作り出している。上原氏の2次製品に該当するものである。

同図1・2は、沖縄製陶器の鉄釉を施釉した甕の胴部を転用したものである。前者は両面とも黒褐色である。後者は表面を橙褐色に、表面は暗茶褐色を呈する。同図3は底面に鉄釉のかかった底部資料を用いたもので破損品である。他の標品と比較すると周辺の打割調整は丁寧である。底面は淡い茶褐色を呈する。同図4は、擂鉢の胴部を転用したもので、表裏面とも赤褐色を呈する。

第11表 円盤状製品出土一覧

挿 図	グリッド	層序	部位	器 色	重量(g)
第 20 図 1	B 9	II	胴部	暗茶褐色 黒褐色	26.1
” 2	B 5	”	”	赤褐色 茶褐色	25.8
” 3	B 6	”	”	灰褐色 橙褐色	5.2
” 4	A 7	”	”	橙褐色	15.7



第20図 円盤状製品

## h. 陶磁器

第12表に示すとおり、陶磁破片が少量得られた。中国製の青磁碗、白磁碗、小杯、染付碗、皿、沖縄陶器などが出土している。

### (1) 青磁

碗 青磁は碗とみられるもののみが出土している。すべて小破片で全形を窺えるものはない。時代は14世紀後半～15世紀頃に属するものと、15～16世紀に属するものがある。

青磁観察一覧

図番号	図版番号	器種	部位	観察記録	所属年代
第22図 1	図版19 1	碗	底部 (高台)	火を受けたと見られる。生地は灰黒色で非ガラス質、気泡あり。高台内部は施釉しない。外面、内面は全面に施釉される。底部縁(畳付)は欠損している。釉は火を受けて、滑面を失っている。	14世紀後半～15世紀
〃 2	〃 2	碗	底部 (高台)	生地は粗く、非ガラス質。高台の畳付面は平坦である。内底面(見込み)は中央に釉が円形に残り、周辺の釉を円形に欠き取っている。高台は施釉しない。	14世紀後半～15世紀
〃 3	〃 3	碗	底部 (高台)	生地は白濁色、非ガラス質。釉は内部全面および外部高台外面まで施す。高台内部は施釉せず。	15世紀～16世紀

### (2) 白磁

白磁は碗、皿に見られるものおよび小杯が出土している。

この中で、沖縄における中国磁器で最も古いとされる、いわゆる玉縁の口縁部をもつ碗および皿(?)が検出されたことは注目される。しかしこれらは全て小破片であり、全形状を窺えない。

白磁観察一覧

図番号	図版番号	器種	部位	観察記録	所属年代
第22図 4	図版19 4	碗	口縁部	生地は白色。気泡あり。口縁外側を肥厚させる。肥厚部は下方に垂れる形で厚くなっており、約1.2cmの幅をもつ。下端は明確な境界がある。	13世紀 ～14世紀 中
// 5	// 5	碗	口縁部	同上、上と同一個体の可能性あり。	同 上
// 6	// 6	碗	口縁部	形状は上と同じだが、別の個体で、肥厚部の幅は約1cmやや小さい。	同 上
// 7	// 7	碗	口縁部	いわゆる玉縁の口縁部をもつ白磁碗で肥厚部の厚さはやや薄くなる。その下端の境はあまり明瞭ではない。生地は黄白色、小さな気泡が見られる。	同 上
// 8	// 8	皿?	口縁部	いわゆる玉縁の口縁部をもつ白磁で、小破片のため器種は不明。皿か碗に属するだろう。全体的に薄手である。肥厚部はうすく、最も厚いところは中位につく。胴部に蓮弁と見られるタテ方向の凹部と凸部がみられる。生地は白色、気泡が見られる。	同 上
// 9	// 9	碗	底部 (高台)	火を受けている。生地は白色で軟質。内底(見込み)は中央部の釉が欠き取られている。	14世紀 ～16世紀
// 10	// 10	碗	底部 (高台)	火を受けている。生地は灰色で粗い。釉はうすくムラがある。 この2破片は同一個体の可能性がある。	14世紀 ～16世紀
// 11	// 11	碗	同 上		

小 杯

一例のみの出土である。近世の古島遺跡などで出土することのある清代の中国磁器である。

小杯観察一覧

器種	部位	観察記録	所属年代
小杯	底部 (高台)	生地がガラス質で、白く硬い。器面の白色釉は光沢を放つ。	清 代

### (3) 染付

#### 碗

中国明代に属すると見られる染付碗の破片少量が得られている。いずれも微細な破片で、文様の様相が把握できない。

#### 皿

中国明代に属すると見られる皿の小破片である。生地はガラス質で硬い。内外器面に文様を施す。内面の文様は草花を模したもののようである。

#### i. 南島須恵器

須恵器あるいは類須恵器と称されているもので、ここでは当面「南島須恵器」と称し、いずれかの用語の定着をまって変更したい。

本遺跡出土の南島須恵器は、厚さによって、薄手、中厚手、厚手の三つに分けられる。いずれも小破片であり、その全形状はよく把握できない。

南島須恵器観察一覧

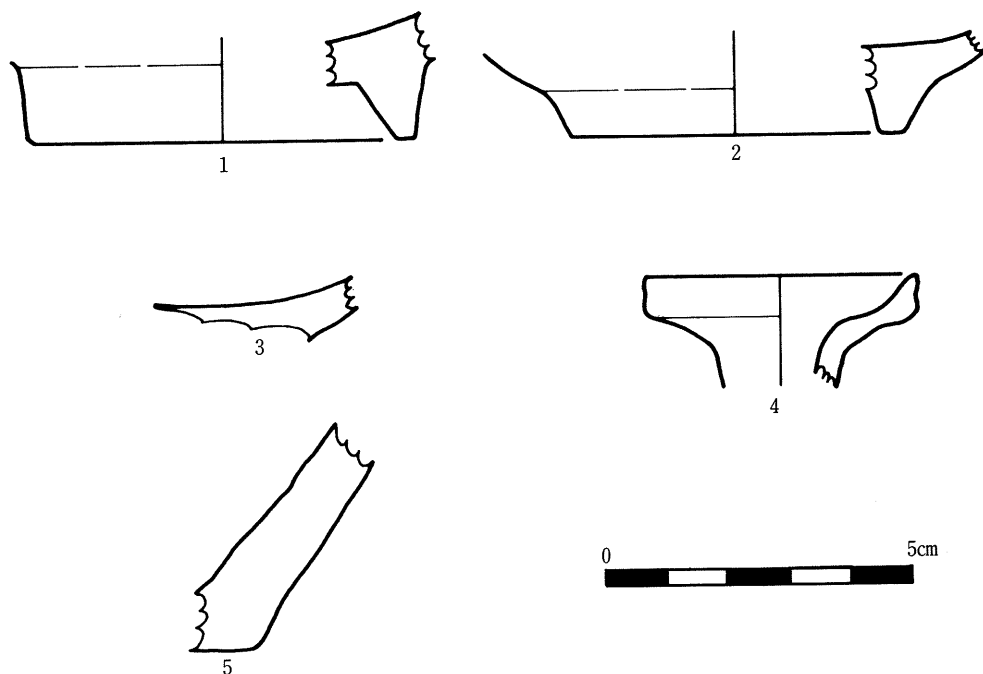
図番号	図版番号	器種	部位	観察記録	所属年代
第23図 1	図版20 1	不明 皿?	口縁部	薄手。いわゆる折れ縁の口縁で、外反する胴部が口縁部近くで折れて垂直方向の口縁部となる。内外に成形時の回転条痕が横方向に無数に見られる。胎土は茶色、内外器面は灰色。	13~14世紀頃?
// 2	// 2	不明 皿?	口縁部	薄手。いわゆる折れ縁の口縁部の形態をなす。口縁近くですぼまる。なお外器面に成形時の回転条痕がある。胎土は茶色、内外器面は灰色。	13~14世紀頃?
// 3	// 3	不明 壺?	胴部	薄手。外面（おそらく肩部付近）の二条の波条文を施す。文様の線は断面半円形状の凹線である。内面には成形時の回転条痕が無数に見られる。外面にもわずかにみられる。	13~14世紀頃?
// 4	// 4	不明 壺?	胴部	薄手。硬質である。胎土は茶色。内器面は灰色、外器面は灰黒色。内器面には成形時の回転条痕が無数に見られる。	13~14世紀頃?
// 5 // 6	// 5 // 6	不明 壺?	胴部	薄手。胎土は茶色。内外器面ともに灰色。内面には成形時の粗い回転条痕が残る。外器面には細く鮮明な凹線が見られるが、タタキ目か回転条痕かは不明。	13~14世紀頃?



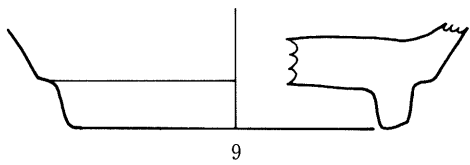
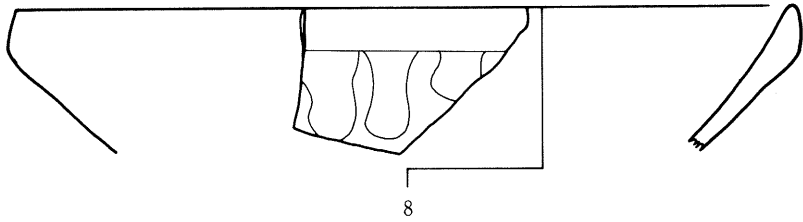
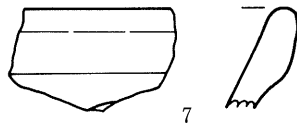
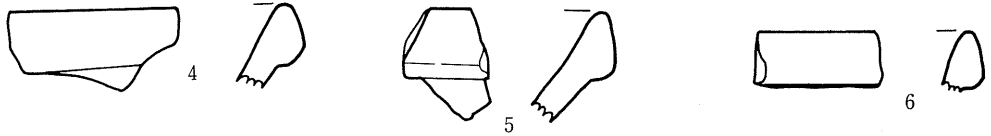
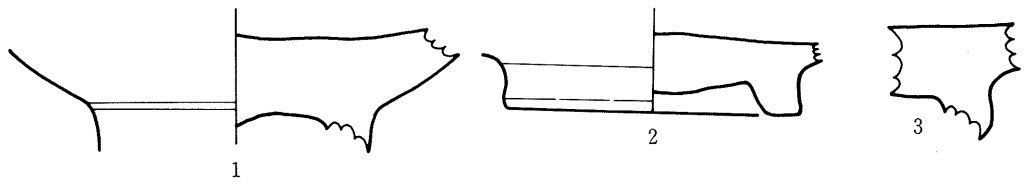
〃 7	〃 7	不明 壺？	胴部	中厚手。胎土は茶色。内外器面は灰色を呈する。外器面にはタタキ目がある。外器面には菱形に交叉させた格子目状のタタキが、内器面には菱形の凹部が連続する編み目の如きのタタキ目が見られる。	13～14世紀頃？
〃 8	〃 8		胴部	厚手。軟質。サンゴ石灰岩と見られる微粒が含まれる。胎土は茶黒色。内外器面は灰色、外器面は粗いタタキ目が見られる。	13～14世紀頃？
〃 9	〃 9		底部	厚手。底部の一部で、安定した丸底である。内外とも灰色を呈する。	13～14世紀頃？

### j. 沖縄産陶器

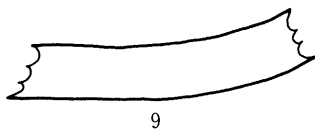
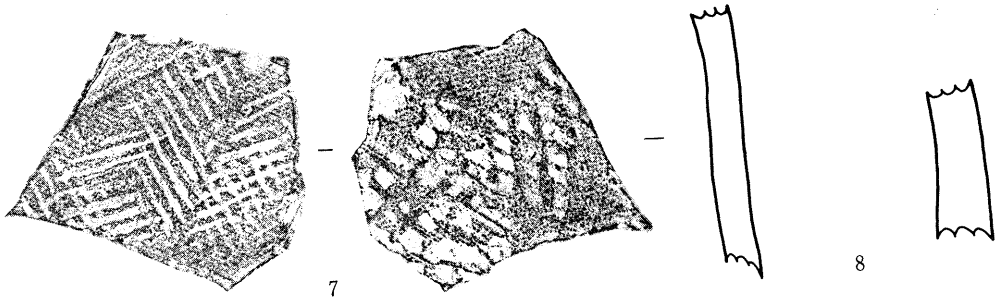
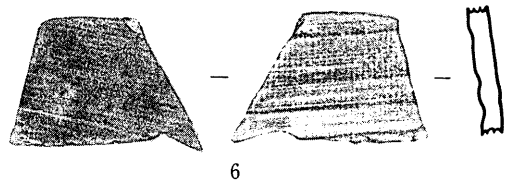
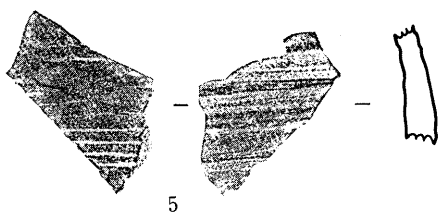
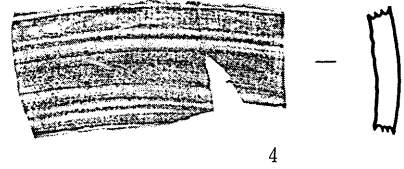
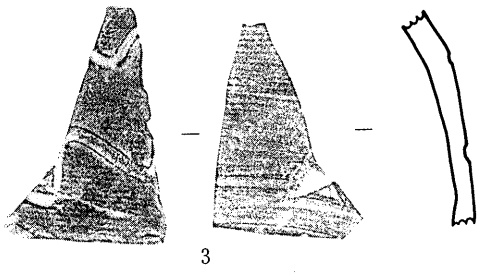
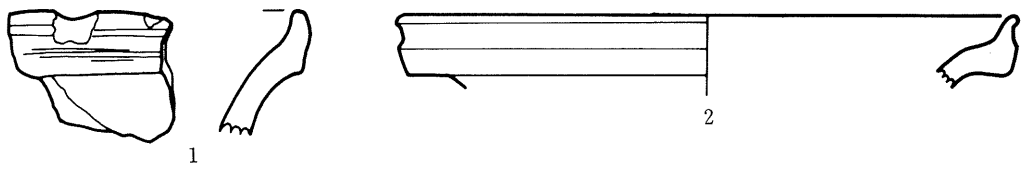
沖縄の窯で製造されたと見られる陶器破片が上層から得られている。近世またはその後の時代に属するもので、この地がいくつかの時代にまたがって遺跡を形成してきたことを示している。図版19～20上参照。



第21図 沖縄産陶器



第22図 輸入陶磁器



第23図 南島須恵器

第12表 輸入陶磁器出土状況

層序	種類 器種 部位	青磁			白磁						小杯	染付		合計	
		碗			玉縁碗			碗				碗・皿不明	碗		皿
		口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	口	胴		胴
I															
II			1	2	2		3	2	2	10	2	1	4	1	30
III					1			1			1				3
IV					1			2			1				4
P.H13				1											1
合計			1	3	4		3	5	2	10	4	1	4	1	38

第13表 沖縄産（上焼）出土状況

層序	部位 器種	口縁部				胴部		底部			蓋	計
		壺	鉢	碗	不明	碗	不明	碗	小杯	不明		
I												
II		1	3	23	2	2	75	29	1	2	3	141
III							2					2
IV				2			4					6
計		1	3	25	2	2	81	29	1	2	3	149

第14表 沖縄産（荒焼）出土状況

層序	部位 器種	口縁部		胴部		底部	計
		甕	播鉢	播鉢	不明	甕	
I							
II		4	2	12	117	1	136
III					2		2
IV					9		9
計		4	2	12	128	1	147

第15表 南島須恵器出土状況

層序	部位	口	胴	底	計
I					
II		1	24	2	27
III			4		4
IV			16		16
P.H54		1			1
P.H68		1		2	3
計		3	44	4	51

## k. 自然遺物

### 黒耀石

右図の写真に掲載した3例が得られた。加工痕や使用痕が認められないことより、自然遺物の項に含めた。黒耀石は沖縄県に産しないもので、九州より持ち込まれた可能性が高い。



1はB<sub>14</sub>グリッド第Ⅲ層、2はB<sub>14</sub>1グリッド第Ⅳ層、3はB<sub>14</sub>グリッド第Ⅱ層よりそれぞれ得られた。

図版4 黒耀石

### 獣骨

本遺跡の出土の獣骨は第15表に示すとおり破片総数42点と非常に少ない。獣骨の同定の結果、ネズミ・ヤギ・イノシシ・ウシの4種類が知り得た。ヤギは後代のものであるが現砂辺集落の前身である古島の時期の資料と思われる。ネズミについてはAトレンチのピット3より得られており興味深いものがある。イノシシとウシはグスク時代の遺跡より検出されることが知られているが、Bトレンチの第2層より主に得られており、当該期に比定されるかどうか判然としない。

### 貝殻

今回、発掘調査の結果、陸産貝（未同定）6種、海水産34科84種が得られた。海水産の棲息地をみると、その殆どが潮間帯・浅海・潮間帯下のものである。それは、遺跡の前面に広がるリーフが採集地であることが容易に推察できる。

ところで、その出土状況は、沖縄製陶器等後代の遺物と伴出する層位である。特に、Bトレンチの第Ⅱ層から集中して得られた。それらは、獣骨の項でも述べたが、かなり古島の時期のものも含まれていると思われる。また、グスク時代の遺物包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）からは量的に少なく、すでに当該期には貝塚時代とは異なり、貝殻の「捨て場」が集落（住居）より離れた場所に存在していたのではなからうか。

1. 棲息地の記号は下記のとおりである。

A 陸産	a 砂底
B 淡水、河川	b 砂泥底
C 潮間帯	c 岩礫底
D 浅海（潮間帯～帯下）	d 岩礁
E 潮間帯下	e サンゴ礁
2. 最小個体数の算出は下記のように行なった。
  1. 2枚貝は右殻と左殻に分け、多い方を最小個体個体数とした。
  2. 巻貝は殻頂有するものを最小個体数とした。
  3. 巻貝のうち、チョウセンサザエ、カンギクについては、殻とフタに分け、多い方を最小個体数とした。
3. 貝種の同定は当教育委員会のサンプルと下記の図鑑を参考にした。
  1. 奥谷喬司著 自然観察シリーズ18生態編『日本の貝』1983年、小学館
  2. 白井祥平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年新生図書
  3. 波部忠重・小管貞男共著標準原色図鑑全集3『貝』1977年保育社
  4. 吉良哲明著 増補改訂版『原色日本貝類図鑑』1964年保育社
  5. 波部忠重著『統原色日本貝類図鑑』1962年保育社
  6. 池原貞雄・初島住彦<生態写真集>沖縄の生物1976年沖縄生物教育研究会編著

第16表 獣骨出土状況

ネズミ

No	トレンチ	遺 構	部 位	個 数	備考
1	A	pH-3	歯	1	
2	不 明	不明	L 下 腕 骨	1	

ヤギ

	トレンチ	層 位	部 位	個 数	備考
3	A	II	歯	1	
	B	II	〃	6	
4	B	II	L 上 腕 骨	1	遠位部

イノシシ

	トレンチ	層 位	部 位	個 数	備考
5	A	II	乳 歯	1	未萌出
6	B	II	後 臼 歯	1	
7	B	II	R 上 齧 第 2 後 臼 歯		
	B	II	顎 骨 片	2	
8	B	II	L 肩 甲 骨	1	
9	B	II	大 腿 骨	1	骨体片
10	B	II	R 脛 骨	1	
11	B	II	腓 骨	1	
12	A	不 明	R 中 手 ( 足 ) 骨	1	
	B	II	〃	1	
13	A	II	中 手 足 ・ 骨	1	第 2 か 第 6
	B	II	長 管 骨 片	7	
	B	不 明	〃	1	
	不 明		〃	1	

ウシ

	トレンチ	層 位	部 位	個 数	備考
14	B	不 明	上 顎 第 2 後 臼 歯	3	
15	B	〃	肩 甲 骨	5	近位端
16	B	〃	L 肩 甲 骨	1	近位端
17	B	〃	L 上 腕 骨	1	遠位端
18	B	〃	L 橈 骨	1	
	B	〃	骨 体 片	1	

第17表 貝種別出土表

No	科名	種名	Aトレンチ			Bトレンチ					不明	合計	棲息地
			I層	IV層	小計	I層	II層	III層	IV層	小計			
1	陸産貝	1	15		15	9	332	11	1	353	1	369	A
2		2	8	2	10	12	275	12	1	300	1	311	A
3		3	3		3		10			10		13	A
4		4	1	1	2		2			2		4	A
5		5					1			1		1	A
6		6	1		1							1	A
7	ニシキウズ科	サラサバテ	2		2		1			1		3	Ee
8		ニシキウズ	1		1							1	Ed
9		ムラサキウズ					1			1		1	Ed
10		ニシキウズ科不明					1			1		1	—
11	リュウテン科	チョウセンサザエ	2		2		4	1		5		7	Ed
12		のふた	3		3		11	2		13		16	Ed
13		カンギク	1		1		1			1		2	—
14		のふた	1		1			2		2		3	—
15	アマオブネ科	オオマルアマオブネ	5		5		19	6	1	26		31	—
16		イシダミアマオブネ	2		2		7	1		8		10	Ccd
17		リュウキュウアマガイ	2		2		6			6		8	—
18		カノコガイ	3		3		7			7		10	—
19		アマオブネ科不明	1		1		3			3		4	—
20	ゴマフニナ科	ゴマフニナ					7			7		7	Cd
21	ウミニナ科	ウミニナ科不明	268	2	270	32	1,540	310	19	1,901	5	2,176	—
22	オニツノガイ科	オニツノ	4		4		6			6	1	11	Ebc
23		クワノミカニモリ	12	1	13		14	3	3	20		33	Ccd
24		カスリカニモリ	1		1	2	2	1		5		6	—
25		アラレカニモリ	2		2		26	1	1	28	1	31	—
26		オッカタカニモリ	1		1							1	—
27		オニツノガイ科不明					4			4		4	—
28	ソデガイ科	マガキガイ	21		21	2	30	2	2	36		57	Db
29		ネジマガキ	5		5	2	4			6		11	—
30		ムカシタモト	7		7		2			2		9	Ec
31		クモガイ	1		1		1			1		2	Eab
32		イボソデ					1			1		1	Eab
33		ソデガイ科不明					2			2		2	—
34	タマガイ科	リスガイ					4			4		4	—
35		ネズミガイ					1			1		1	—
36		フロガイ	1		1		8		1	9		10	—
37		クチグロタマガイ	1		1							1	—
38		ウコントミガイ					1			1		1	—
39		ロウイロトミガイ					1			1		1	—
40		タマガイ科不明					1		1	2		2	—
41	タカラガイ科	ハナビラダカラ	10		10	1	12			13		23	CEde
42		ハナマルユキ	5		5		8		1	9		14	CEde
43		キイロダカラ	1		1		3	1	1	5		6	Ccd
44	タカラガイ科	ナツメモドキ	1		1							1	Cc
45		ホシキヌタ					1			1		1	Dcd
46		ヤクジマダカラ						1		1		1	Ed
47		タカラガイ科不明	1		1		3			3		4	—
48	フジツガイ科	シオボラ					1			1		1	Ecd
49		フジツガイ科不明					1			1		1	—
50	オキニシ科	シロミオキニシ	1		1		2			2		3	Ed
51	アッキガイ科	ツノレイシ	1		1	2	1			3		4	Cd
52		アカイガレイシ					1			1		1	Ed
53		ムラサキイガレイシ					1			1		1	De
54		ウネレイシダマシ	1		1		4	1		5		6	—
55		クチベニレイシダマシ					1			1		1	—

No	科名	種名	Aトレンチ			Bトレンチ					不明	合計	棲息地	
			I層	IV層	小計	I層	II層	III層	IV層	小計				
56		アツキガイ科不明						1				1		—
57	タモトガイ科	1	4		4	1	11	3	1	16		20		—
58		2	18		18	1	69	15		85		103		—
59		タモトガイ科不明	2		2		1			1		3		—
60	エゾバイ科	マルベッコウバイ	1		1							1		—
61		ノシガイ					1			1		1		—
62	オリイレヨフバイ科	アツムシロ	2		2		2			2		4		—
63		ムシロガイ	1		1							1		—
64		ハナムシロ					1	1		2		2		—
65		アワムシロ					2			2		2		—
66		ミガキカニノテムシロ	1		1		5	1		6		1		—
67		オリイレヨクバイ科不明	3		3		1			1		4		—
68	イトマキボラ科	ヒメイトマキボラ					1			1		1		Ed
69		ベニマキ					1			1		1		—
70		アヤツノマタモドキ								1		1		—
71		イトマキボラ科不明					1			1		1		—
72	オニコブシ科	コオニコブシ					3			3		3		Ccd
73	フデガイ科	オオミノムシ					1			1		1		—
74	イモガイ科	マダライモ	2		2		9		1	10		12		Dd
75		サヤガタイモ	2		2		2	1		3		5		Cab
76		ヤナギシポリイモ	1		1		4			4		5		Ecd
77		サラサモドキ	1		1							1		—
78		キヌカツギ						3		3		3		Ecd
79		クロミナシ					1			1		1		CEab
80		ミカドミナシ	1		1							1		Eab
81		アジロイモ					1			1		1		—
82		アケボノイモ	1		1							1		—
83		ゴマファイモ					1							—
84		イモガイ科不明	14	1	15	2	18	5	2	27		42		—
85	クダマキガイ科	ユウビコトツブ					2			2		2		—
86	オカミミガイ科	オカミミガイ科不明					1			1		1		—
87		巻貝不明	5		5		12			12		17		—
88	フネガイ科	リュウキュウサルボウ	1		1				1	1		2		Eab
89		エガイ	1		1	1	3			3	4	4		Dcb
90	イガイ科	クジャクガイ		1	1		1			1		2		—
91		イガイ科不明					1			1		1		—
92	ウグイスガイ科	アコヤガイ	1		1		1			1	2	2		Ed
93	ウミギク科	メンガイ	1		1		2			2		3		Ee
94	ザルガイ科	カワラガイ	1		1		1			1		2		Da
95	イタボガキ科	イタボガキ科不明	1		1		1			1		2		—
96	トヤマガイ科	クロフトマヤガイ	1		1		1		1	2		3		—
97	ツキガイ科	カブラツキガイ					1			1		1		—
98		ウラキツキガイ					1			1		1		Ea
99		ヒメツキガイ	1		1		2			2		3		—
100	シャコガイ科	シャコガイ科不明	1	1	1		3			3		4		—
101	マルスグレガイ科	アラスジケマンガイ						1	1			2		Da
102		ホソソジイナミガイ	4	1	4	1	4	2		5		9		Da
103		ヌノメガイ	3	7	3	10	1	1	11	18		Da		Da
104		アラヌノメ	1		1		1	1		2		3		Ea
105		アサリ	1		1							1		—
106	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	3	4	1	5	1	14	16	3	5	1	23	—
107	リュウキュウマスオ科	マスオ	3	2	3		1			1		2		Da
108		マスオガイ					3		1	4		4		—
109	チドリマスオ科	イソハマグリ	5	8	1	9	8	7	1	1		9		Cb
110		二枚貝不明	2	1		2	2			1		3		—
					42							81		123



## 第V章 まとめ

以上、発掘調査の成果について述べてきた。ここでは、その成果を踏まえて若干の要点にふれてまとめとしたい。

発掘調査の経緯については、第I章でも述べたように県企業局の導入管敷設工事に伴う緊急発掘調査で、幅2m×長さ108mの限られた調査面積であったが、多大な成果が得られた。

### 立地について

第II章でも述べたように、本遺跡は東側（国道58号線）から西側（海側）にかけて緩やかなスロープになる標高15m前後の琉球石灰岩の台地上に形成されている。このような遺跡のありかたは、恩納村の熱田貝塚<sup>注5</sup>と同様であるが、次に豊見城村伊良波東遺跡<sup>注6</sup>のように小高い丘に形成されている箇所があり、双方の遺跡のあり方が性格的に異なるのか、今後の大きな課題である。

### 層序について

層序は地山まで含めて6枚からなるが、うち明確な文化層は第IV層と第V層の2枚で、前者はグスク時代開始期のものである。後者は沖縄貝塚時代前期のもので、溝状になっていることから、隣接する砂辺貝塚からの流れ込みと思われる。

### 遺構について

地山において柱穴等の遺構が検出されたが、発掘調査面積の関係で明確なプランを捉えることができなかったことは残念である。ただ、柱穴のあり方や石皿が根石に使われていることから、掘立て柱の住居跡であることが推察できる。また、鉄滓や羽口なども出土していることから鍛冶跡もあったことが窺える。

### 遺物について

出土遺物は自然遺物と人工遺物に大別でき、前者のほとんどが近世の所産と考えられるが、B15グリッドにおいて若干の獣・魚骨と貝類が検出された。後者には注目されるものが多い。ひとつには輸入陶磁器である白磁の玉縁口縁が出土していることである。また、石鍋及び須恵器の破片がセットで検出され、グスク時代開始期の指標として位置づけられている。県内の類例遺跡における石鍋の出土は、そのほとんどが縦位の把手付きであるが、第19図2に示したものは鏝付きの破片と考えられるもので、注目すべき標品である。

さらに、石鍋の破片を二次的に加工したもの（第19図4～8）や磨り潰して土器の混和材として用いられており、かなり貴重なものであったことが窺える。

土器は人工遺物のなかでは最も多く検出され、そのほとんどがグスク系土器で、他のグスク時代の遺跡でみられるものと基本的な差異は認められないが、明瞭な壺形になるものは得られてない。それらの土器に伴って尖底の鉢形土器が出土している。本標品は沖縄貝塚時代後期によく見られるものであり、時期的に差異があるのか、継続して当該期まで残る形態なのか判断とせず、今後の大きな課題である。

石器には石斧・すり石・敲き石・石皿などがある。石皿は柱穴の根石として利用されており、

興味深い資料である。その他には鉄滓・羽口が出土しているが、明確な鉄製品は出土していない。

以上のことから、本遺跡はグスク時代開始期の集落跡であったことが窺えると同時に、交易地としての拠点であった蓋然性も高い。

本遺跡の範囲が現砂辺集落と嘉手納基地内にも延びていることは明らかであり、今後とも住宅建築や道路工事等の場合には文化財保護当局と十分な協議が必要である。

〈注〉

注1. 豊見城村教育委員会「伊良波東遺跡」『豊見城村文化財調査報告書第2集』 1987年

注2. 賀川光夫・多和田真淳「宜野湾村大山貝塚の調査概要」

『文化財要覧』 1959年

注3. 沖縄県教育委員会「稲福遺跡発掘調査報告書」(上御願地区)

『沖縄県文化財調査報告書第50集』 1983年3月

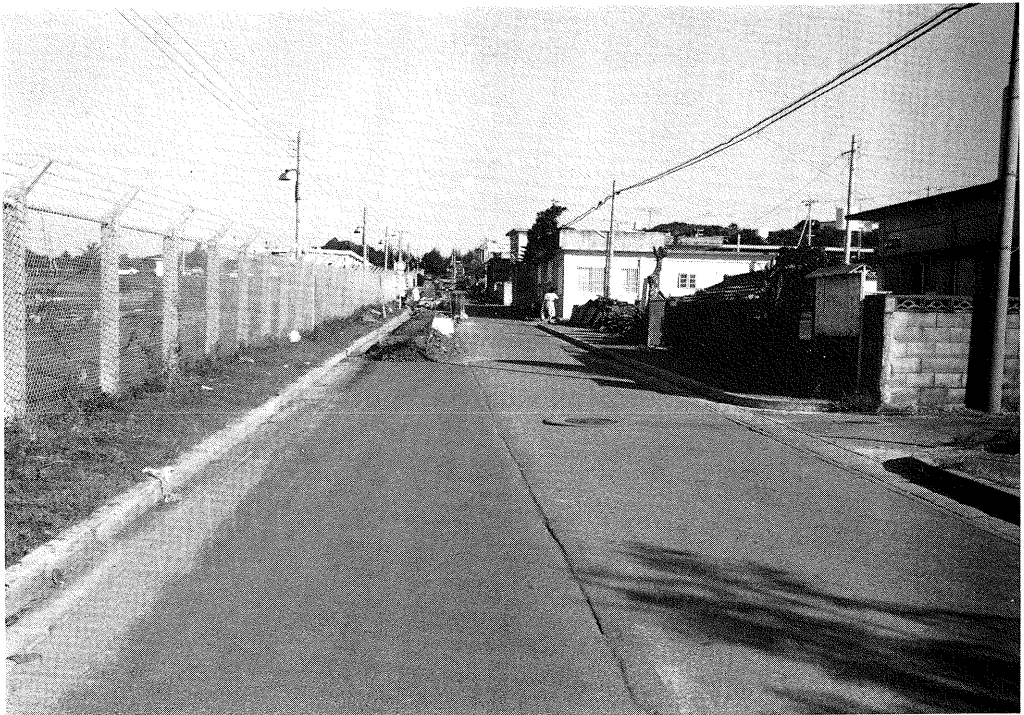
注4. 上原静「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 1986年

注5. 沖縄県教育委員会「熱田貝塚発掘調査ニュース」 1978年3月

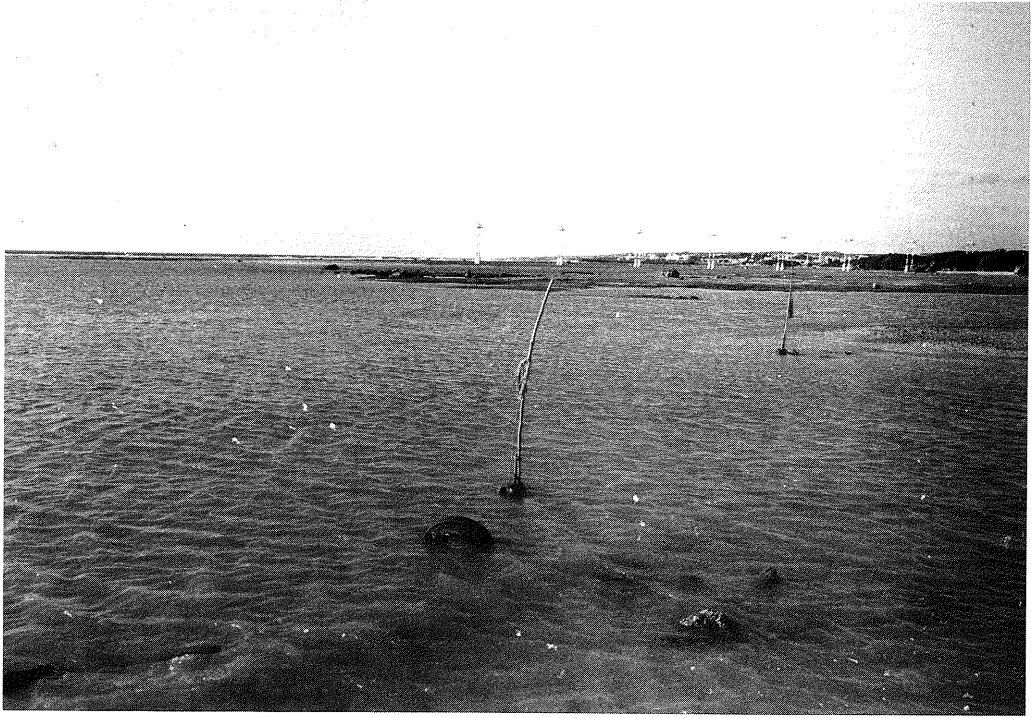
注6. 注1に同じ

版 圖





図版 5 遺跡の遠近景

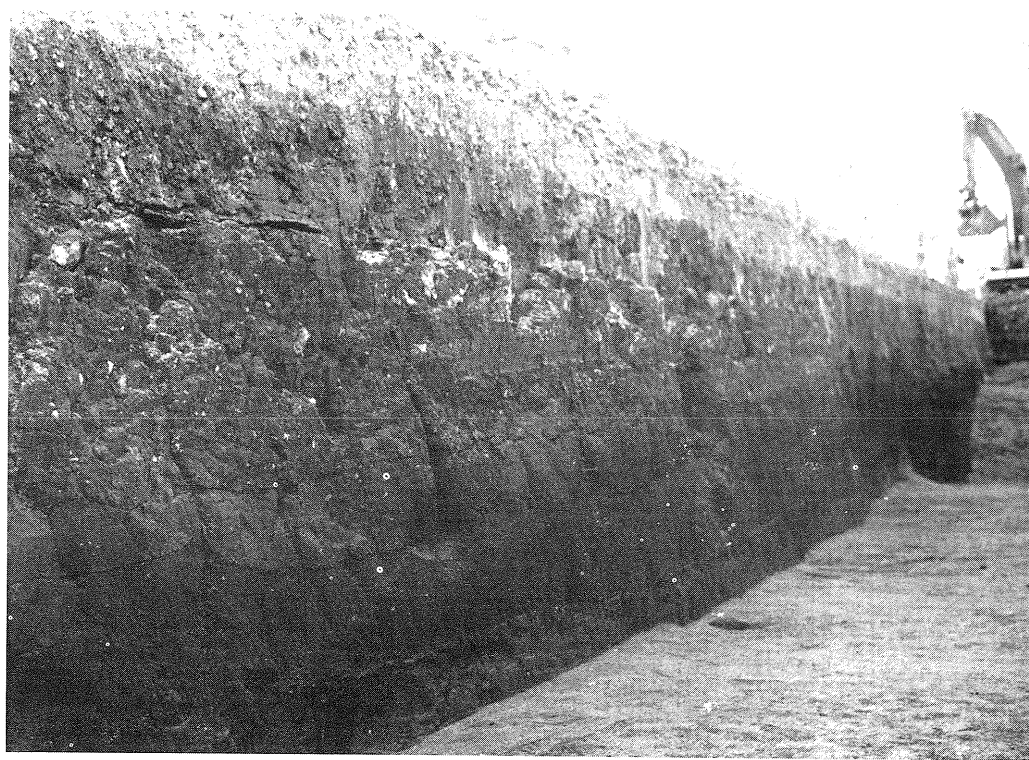


图版 6 砂边海岸



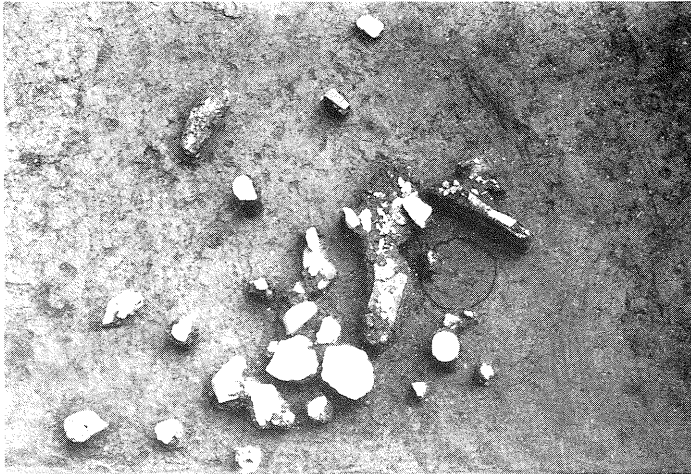
図版7 発掘風景



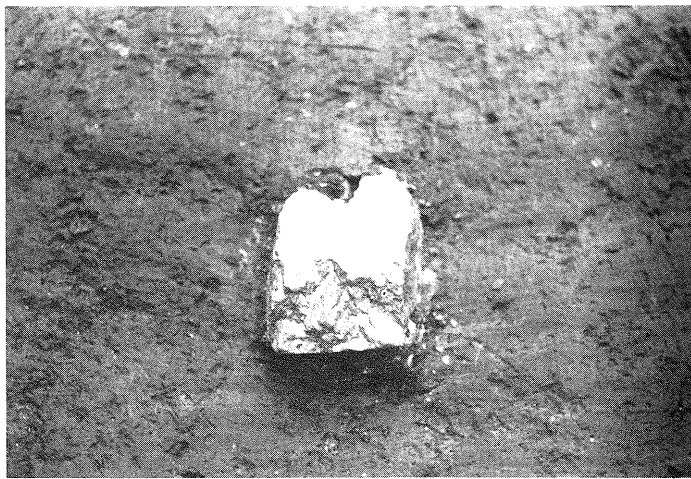


図版8 層序 上：Aトレンチ、下：Bトレンチ





1. 獸骨

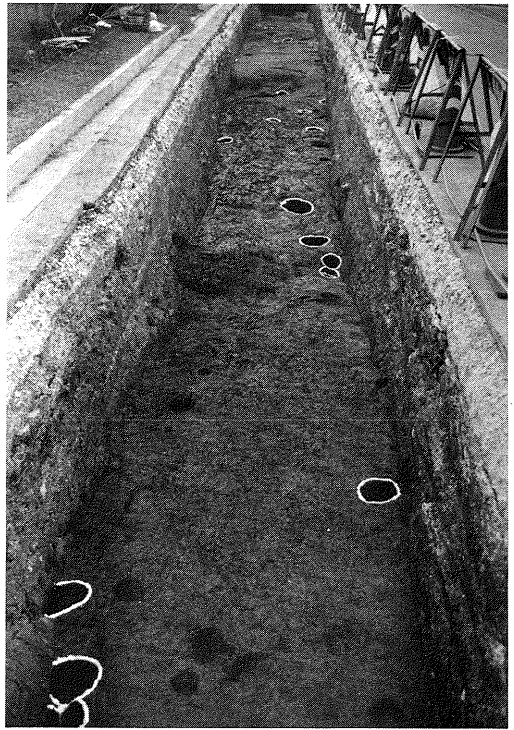
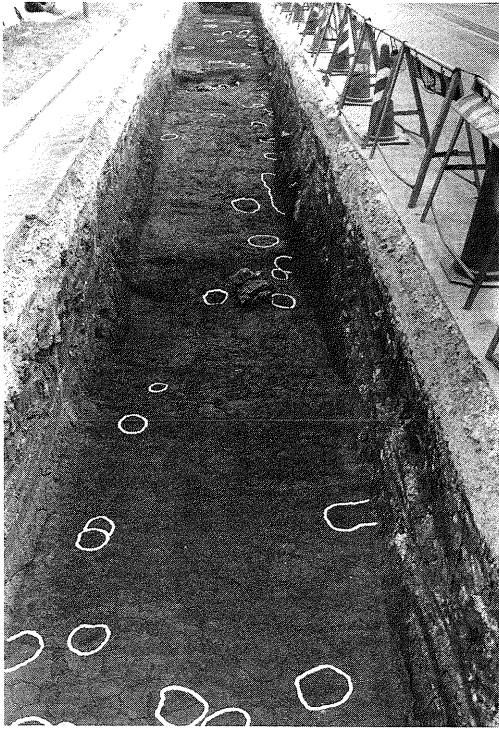
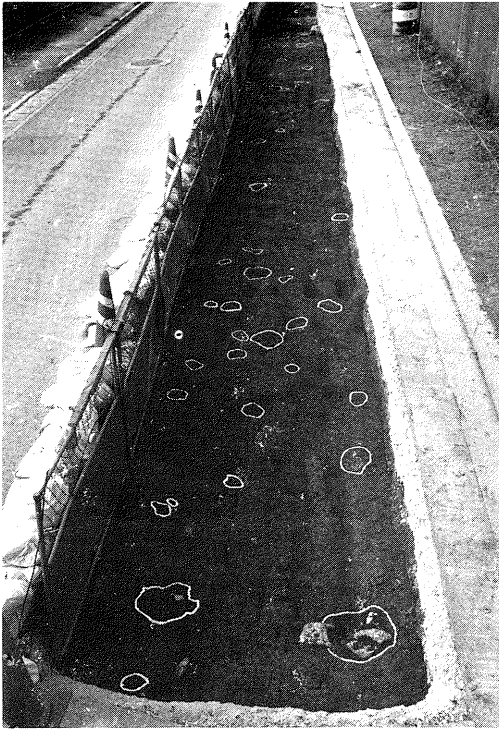


2. 滑石製品

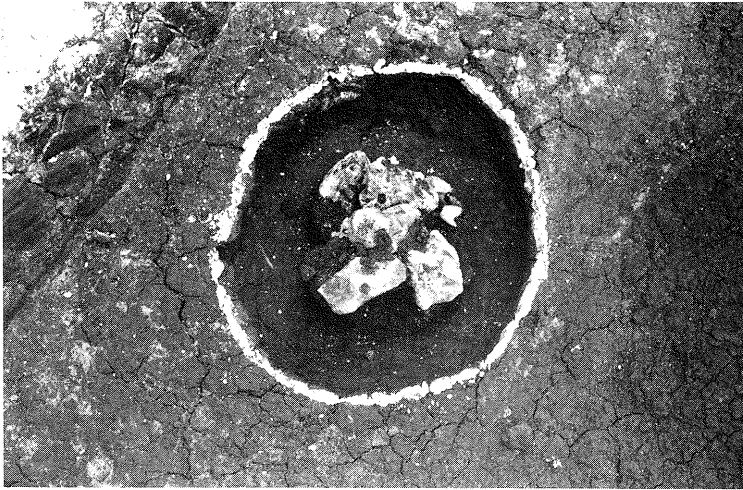


3. 土器

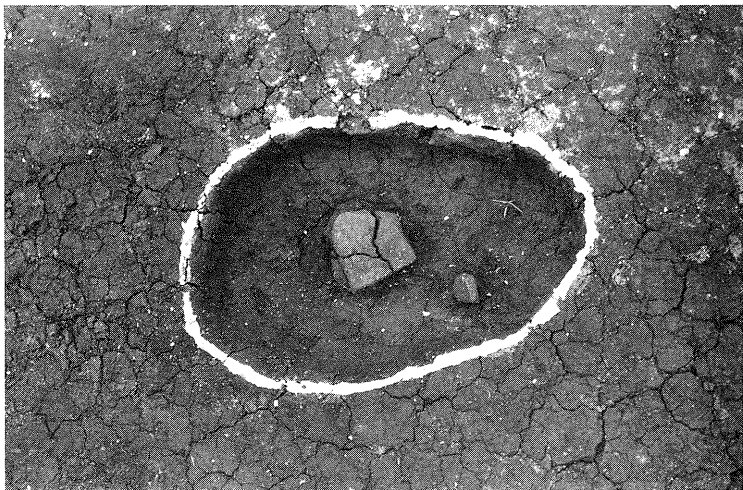
図版9 遺物出土状況



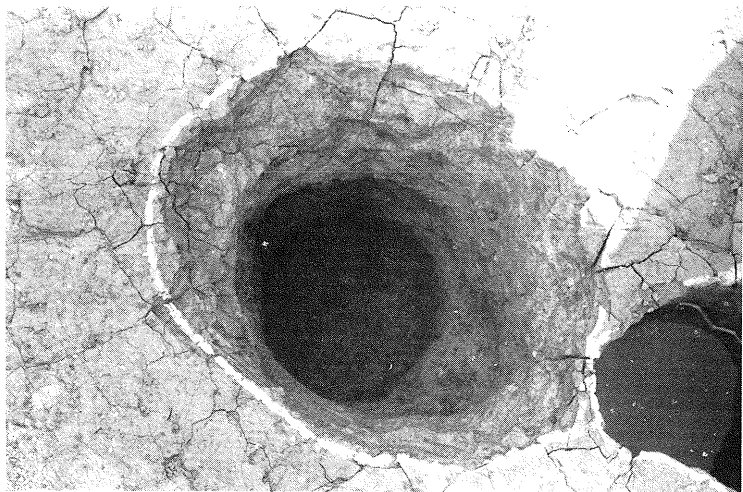
図版10. ピット群 上：Aトレンチ、下：Bトレンチ



P. H7

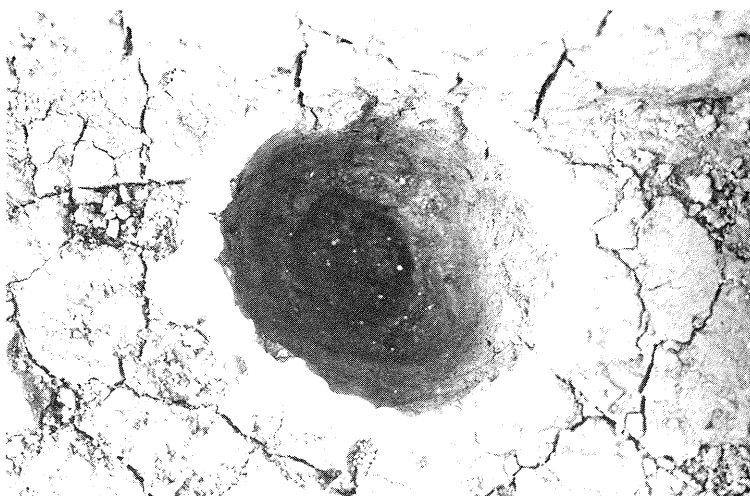


P. H17

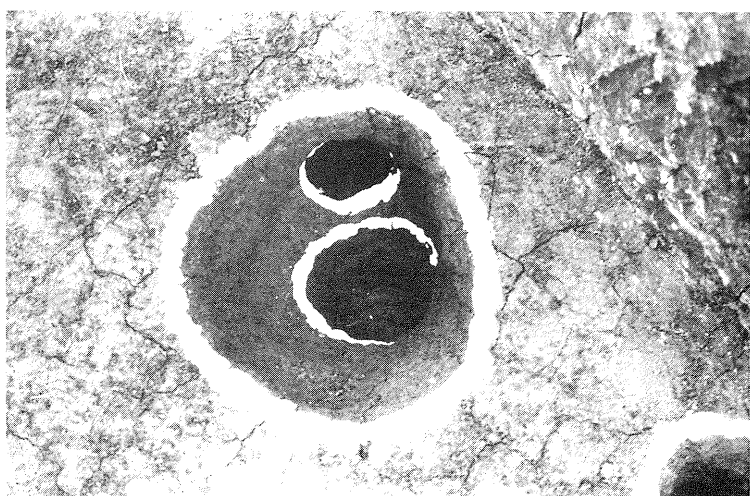


P. H62  
(石皿を取り上げ後)

図版11. Aトレンチのピット



P. H26



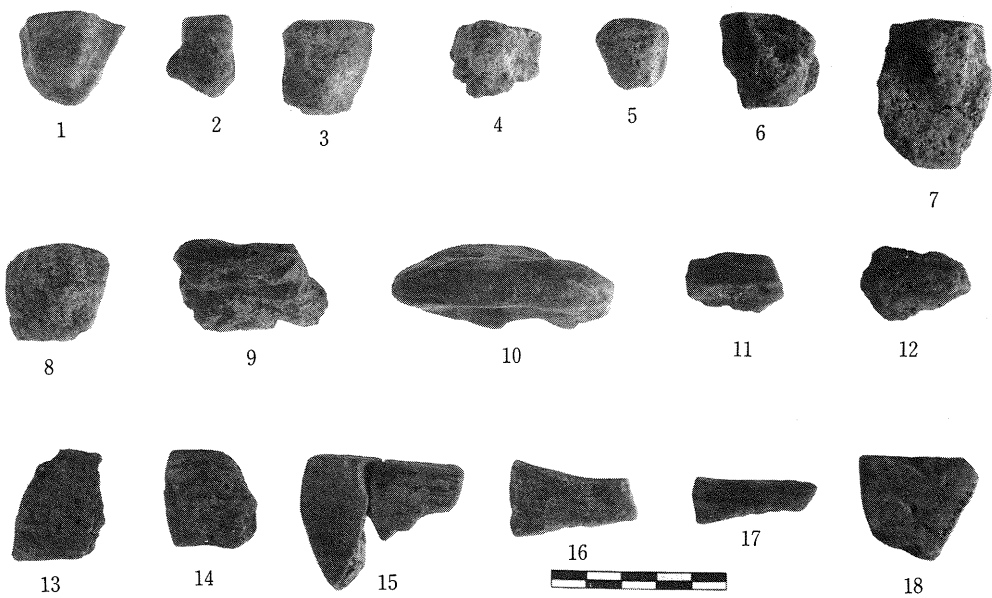
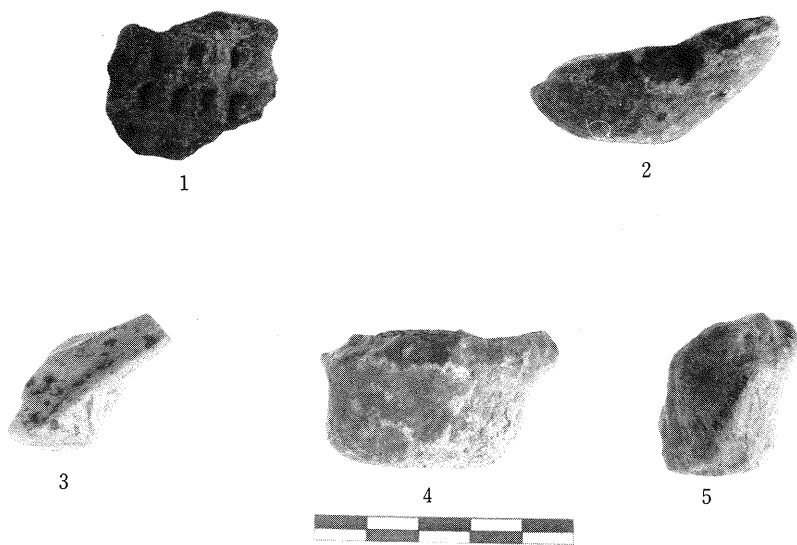
P. H30



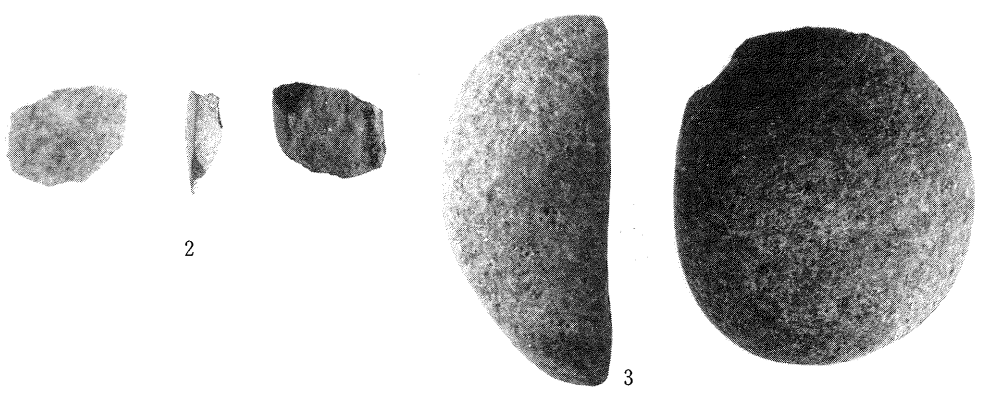
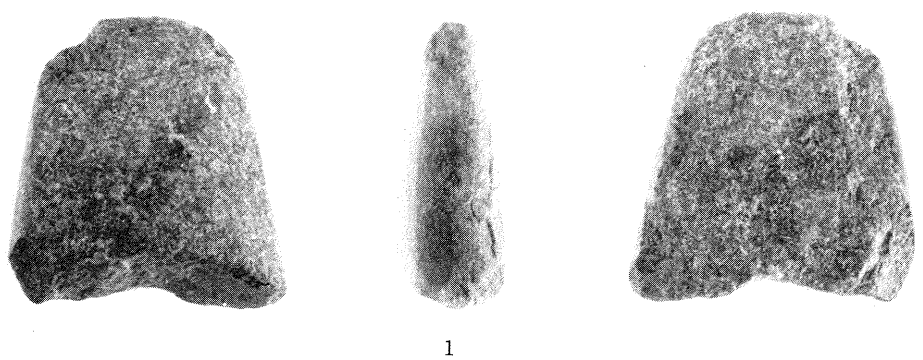
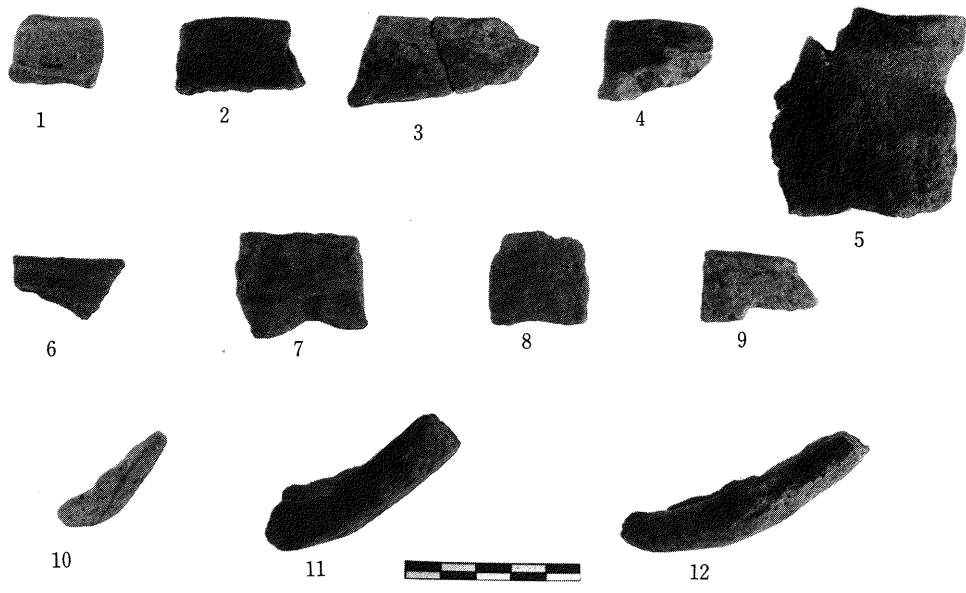
P. H31, 32

図版12. Bトレンチのピット





図版13. 上：大山式土器 1、尖底土器 2～5、  
下：鍋形土器



図版14 上：鉢形土器1～5、不明土器6～9、底部10～12  
 下：石斧1・2、すり石3

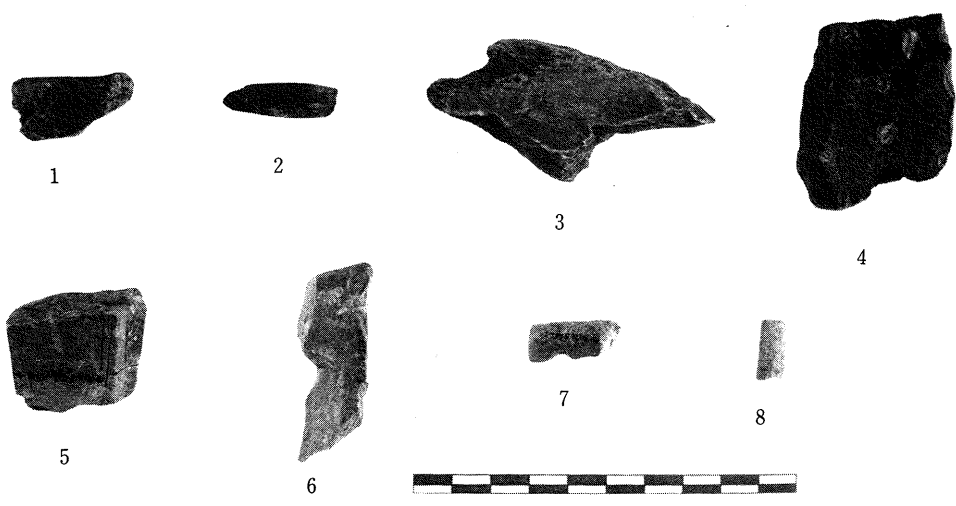


図版15 たたき石1、石皿2



图版16 羽口 上：表、下：裏





图版17 滑石製品 上：表、下：裏



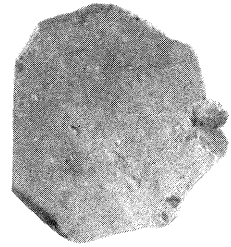
1



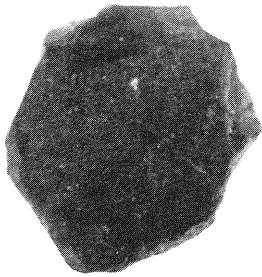
2



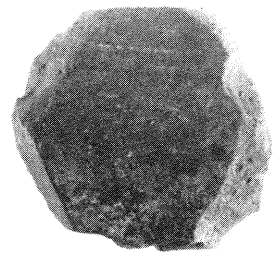
3



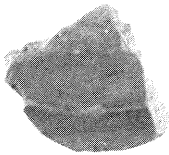
4



1



2

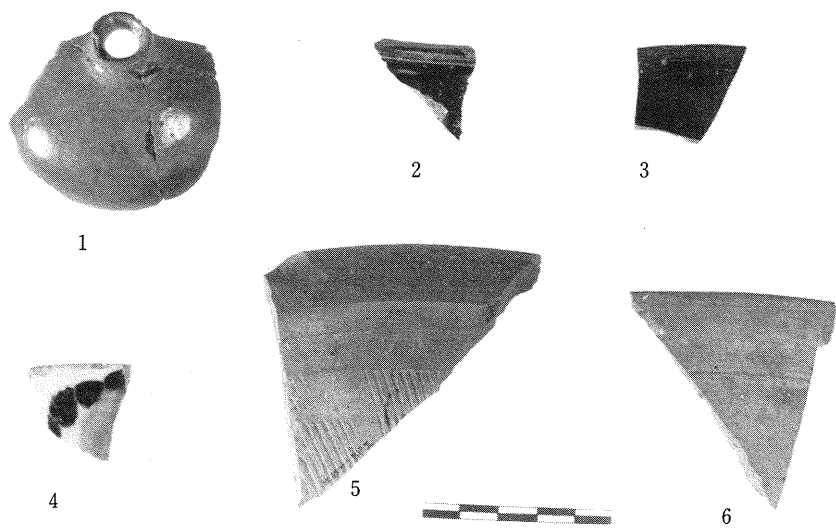
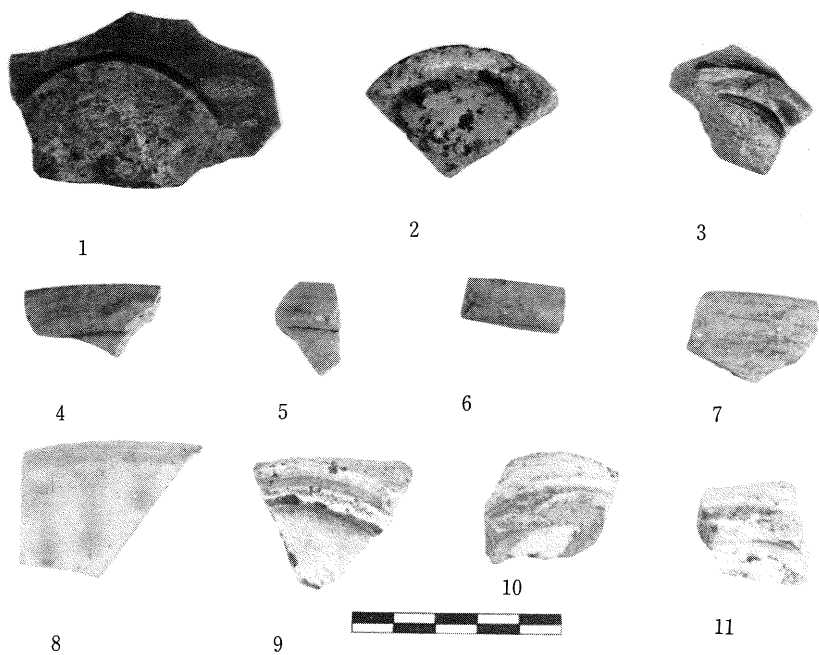


3

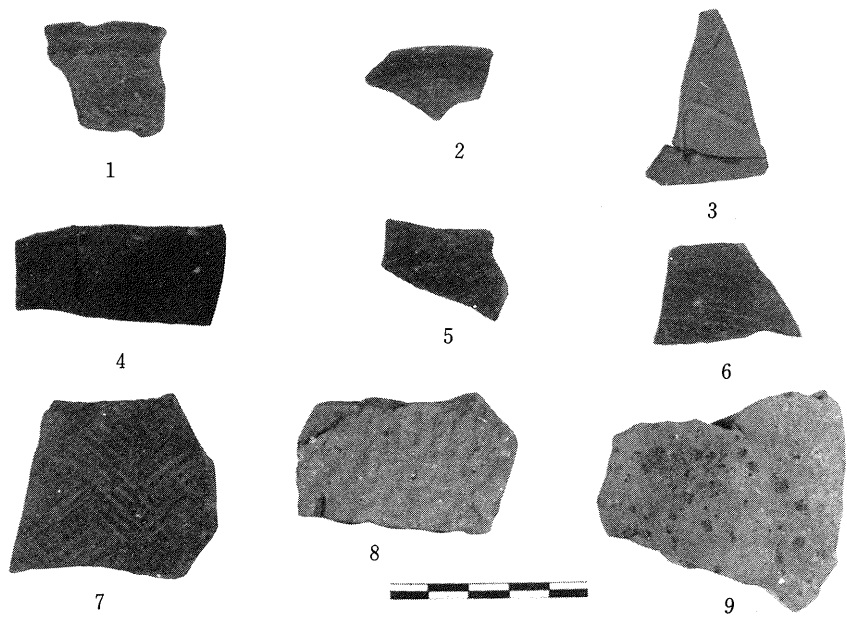


4

図版18 円盤状製品 上：表、下：裏



図版19 上：磁器、青磁（底部）1～3、白磁（口縁部）4～8、白磁（底部）9～11  
 下：沖縄製陶器 壺1・2、碗3・4、搦鉢5・6



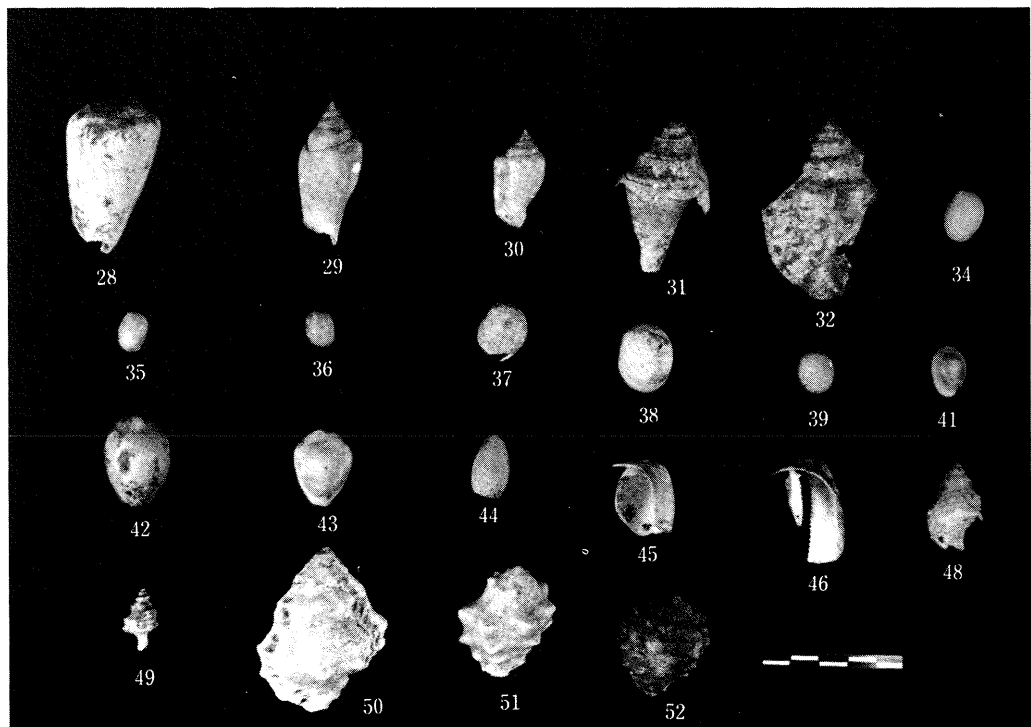
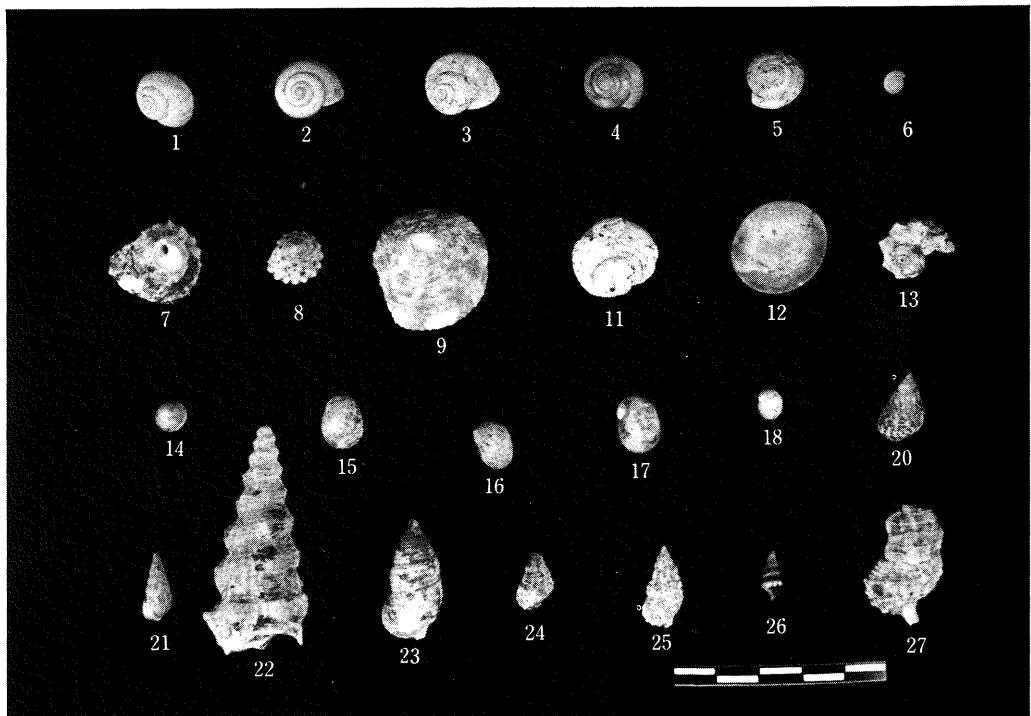
図版20 上：沖縄製陶器（底部）  
 下：南島須恵器（口縁部）1・2、（胴部）3～8、（底部）9



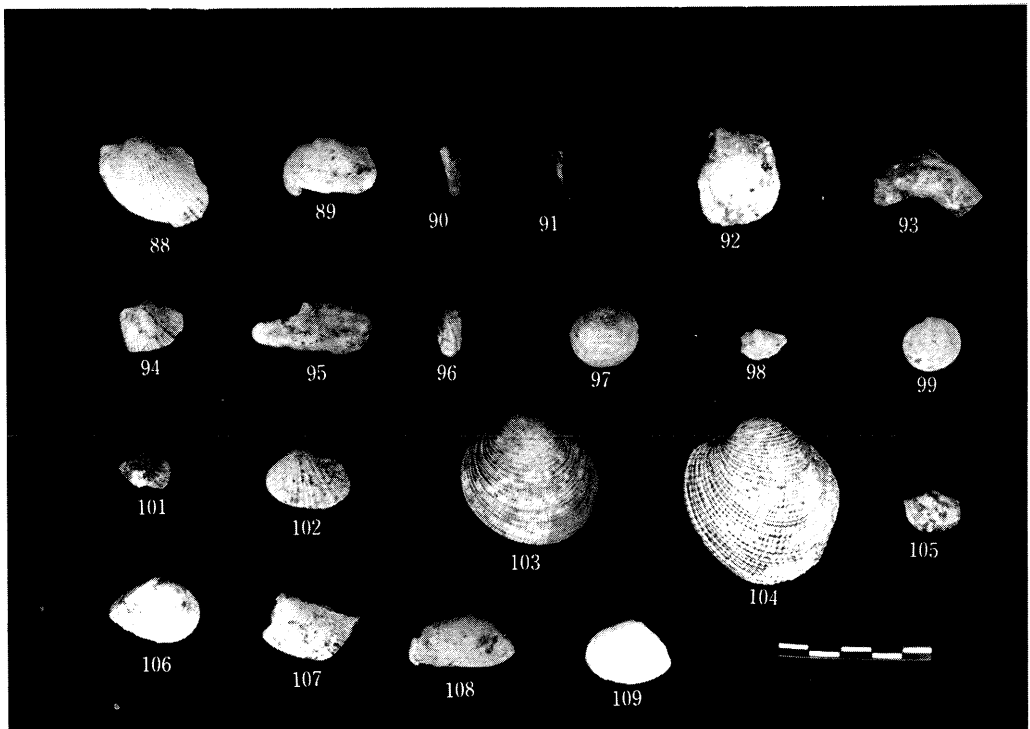
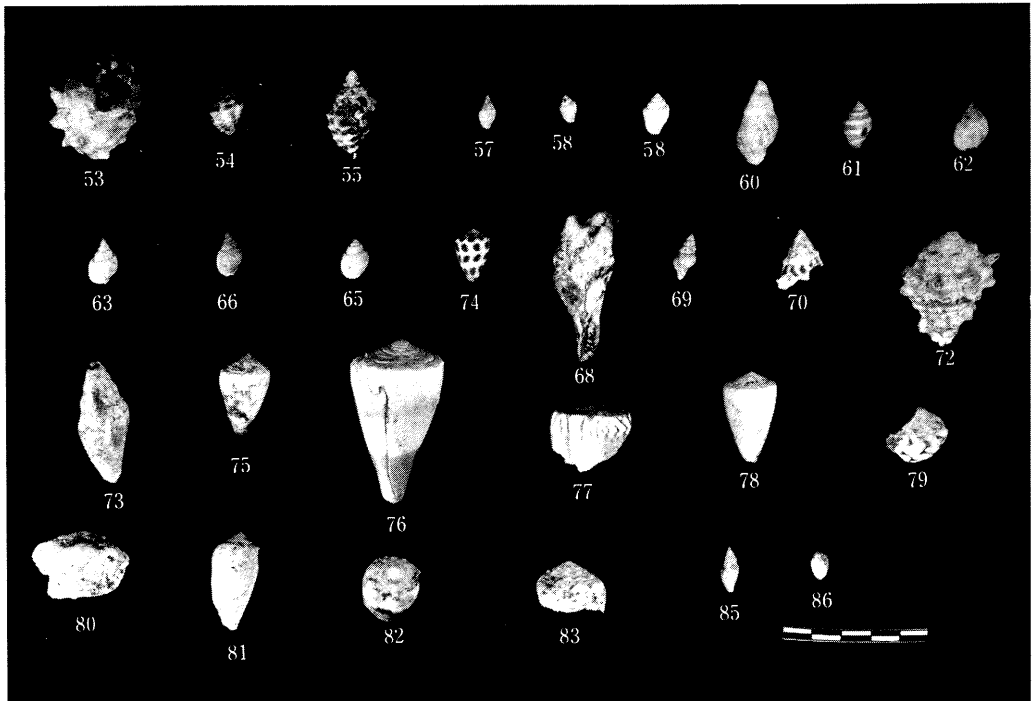
図版21 獣 骨 (種・部位名は第16表と同じ)



図版22 獣 骨 (種・部位名は第16表と同じ)



図版23 貝 類 (貝種名は第17表と同じ)



図版24 貝 類 (貝種名は第17表と同じ)



砂辺サーク原遺跡<正誤表>

頁	行	誤	正
前1	8	保存を	保存の
前4	11	文部助	文学部助
〃	16	挿入	第三章・第四章
18	22	同図1	同図1.0
〃	24	同図2・3	同図1.1・1.2
43	9	次に	逆に

沖縄県文化財調査報告書 第81集

北谷町  
砂辺サーク原遺跡

— 北谷浄水場への導入管敷設工事に  
伴う緊急発掘調査報告書 —

昭和62年3月30日

編集 沖縄県教育庁文化課  
発行 沖縄県教育委員会  
那覇市旭町1番地  
TEL 0988 (66) 2731  
印刷 文進印刷株式会社  
那覇市上間567番地  
TEL 0988 (55) 2323